

## 第八回 総合研究機構研究成果報告会

### モチベーションを高める教育法 意識変化をもたらす教育の実践報告

日 時：2012年11月9日（金） 13：00～18：30

会 場：早稲田大学 小野記念講堂（27号館<ワセダギャラリー>地下2階）

#### ●基調講演

感動教育による概念的思考と論理的思考の併用がもたらす学習

－意欲の向上及び意識変化の実践報告－

スタント・カワン（早稲田大学国際学術院教授・早稲田大学臨床教育科学研究所長）

#### ●招待講演

意識変化の触媒となる授業

Lecture catalyzing students mind transformation

田辺 孝二（東京工業大学イノベーションマネジメント研究科教授）

夢はありますか？ 夢がある人の人生、ない人の人生

吉川 英治（国際ビジネス誌編集長・世直しボクサー）

#### ●コメンテーター

「産学官連携プロジェクトを通じた大学生の地域力活性」

宮崎 里司（早稲田大学国際学術院教授・早稲田大学オーストラリア研究所長）

#### ●招待講演

モチベーションを高める教育法

実践報告『「桃太郎文化の浸透と知徳体一体教育」で業界NO.1を目指す』

橋本 英雄（株式会社丸和運輸機関執行役員教育本部長）

スタント・メソッド「21日ルール」の実践報告

蘇 霞（株式会社丸和運輸機関経営企画本部長）

「感動を受ける自分」から「人を感動させる自分へ」

スタントメソッドに影響を受けた多くの人たちに取材して感じたこと

宮崎 計実（グローバルコミュニティー編集長）

7年経っても心に残る教授の生徒への想い

－夢への道－

栄 琦（Supplier Manager, Global Purchasing, Xerox Corporation）

#### ●コメンテーター

樋口 清秀（早稲田大学国際学術院教授・早稲田大学ヒューマンリソース研究所長）

#### ●Testimonial

私が考えるモチベーション「GIVE, GIVE, GIVEの精神」

北村 麻里子（早稲田大学国際教養学部2012年卒業・東京都立国際高等学校英語教諭）

「モチベーションを科学する」学生

廣松 大和（早稲田大学国際教養学部2012年卒業・科目等履修生）

「What's Your True Motivation」スタントゼミを取るようになったきっかけ：

「劣等感」を克服したい、自分を変えたい

水谷 真愛（早稲田大学国際教養学部4年）

伝わる者から伝える者へ

－20～30代への教育の必要性－

小西 孝和（早稲田大学国際教養学部3年）

動機付け教育の重要性

窪 響（早稲田大学国際教養学部3年）

「先生」の意義

李 麗媛（早稲田大学国際教養学部4年）

魔法の種

Tai Beitzce（早稲田大学国際教養学部4年）

人生を変える講義

津江 南（早稲田大学国際教養学部2年）

Growth through speech

Alex Wang（早稲田大学国際教養学部4年）

Be an Independent Thinker

Alisha miho Uesato (Drumm)（早稲田大学国際教養学部4年）

変化していく教室

入江 彩花（早稲田大学国際教養学部3年）

スタント教授の力

興梠 立哉（交換留学生）

#### ●閉会の辞

スノードン ポール

前早稲田大学国際教養学部長（早稲田大学国際学術院教授）

## 第八回 総合研究機構研究成果報告会

### モチベーションを高める教育法： 意識変化をもたらす教育の実践報告

\*司会：

お待たせいたしました。ただいまから、早稲田大学総合研究機構、第8回研究成果報告会「モチベーションを高める教育法－意識変化をもたらす教育の実践報告」を開会いたします。

### 〔開会の辞〕

森 原 隆

(早稲田大学総合研究機構長／早稲田大学文学学術院教授)

\*司会：

初めに、総合研究機構長森原隆より、開会のご挨拶を申し上げます。

皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました総合研究機構の機構長を務めております文学学術院の森原と申します。本日はどうぞよろしく願いいたします。

本日はお忙しい中を多数の方々にご参加いただきまして誠にありがとうございます。シンポジウムの主催者といたしまして一言ご挨拶をさせていただきます。

早稲田大学の総合研究機構、プロジェクト研究所の主催で本年もまたこのようなシンポジウムを開催する運びとなりまして、関係各位の方々に厚く御礼を申し上げます。また、学内からは早稲田大学理事の深澤先生にもお忙しい中を駆けつけてくださりまして、厚く御礼を申し上げます。

ところで、毎年このシンポジウムを開いているのですが、その時に説明させていただいておりますが、この主催者であります早稲田大学の総合研究機構、そしてプロジェクト研究所について、特に学外の方には少しわかりにくい組織であると思いますので説明をさせていただきたいと思います。

普通、世間一般的には研究所といいますと、何か大きな建物ですとか、永続的な研究員の組織を思い浮かべてしまいますけれども、早稲田大学のプロジェクト研究所といいますのはそれと少し違っております。ある一定の期間内、大体3年とか5年のケースが多いのですけれども、その期間内にある所定の研究のプロジェクトを実施するために設置されます時限的・機能的な研究所でありまして、現在、学内にはそのようなプロジェクト研究所が大小合わせて160ぐらいございます。総合研究機構はそのうち理系、文系合わせて120ほどのプロジェクト研究所を総合的に束ねる組織となっております。

総合研究機構は、特にこのプロジェクト研究所全体の設置ですとか運営に関する業務、人事、経理、庶務全般を担当しておりまして、広報活動も行っております。本日のこのシンポジウムもそうした広報活動の一環でございます。

さて、今回は「モチベーションを高める教育法－意識変化をもたらす教育の実践報告」というテーマでありまして、研究報告と実践報告を兼ねたシンポジウムとなりました。ご承知のように、大学教育に関しては現在いろんな問題点が指摘されまして、見直しや改革が進んでおります。特に学生に関しましては、その学習能力の低下や意欲のなさ、あるいはさまざまな精神的な悩みを抱え込んでいることなどが現在ますます表面化しているかと思えます。

本日のシンポジウムの企画立案者で、基調講演もなさいますカワン・スタント先生は、この方面で、いわゆるスタントメソッドという画期的な教育方法を実践され、多くのやる気のない、モチベーションの低い、そういう学生を蘇生させて真のリーダーとして世に送り出してこられました。

スタント先生の最近の著書をこのシンポジウムに合わせて読ませていただきました。スタント先生ご自身がまさにこのメソッドの体現者であるように思われました。ご本人から後ほど紹介があるかもしれませんが、スタント先生はインドネシアの中国系の家庭にお生まれになり、華人として差別を受けながら苦学を続け、23歳の時にようやく留学のために来日されました。しかし、日本に初めて来られたときはまだたどたどしい日本語しか話せず、語学学校、大学とご苦勞の連続であったように思われます。また、東京工大、東北大で2つの学位を取られても、日本の大学では定職になかなか就くことができず、アメリカの大学で准教授として迎えられたときはもう38歳になっておられました。

その後、日本に戻ってこられて、この早稲田大学には2003年に着任されました。現在、4つの学位をお持ちで、医療工学、臨床教育心理学等の第一線で活躍されておられますが、スタント先生のこれまで歩んでこられた道はまさに波乱万丈で、立志伝のようにご著書を感じ銘をもって読ませていただきました。

本日のシンポジウムはこのようなスタントメソッドを初めとした、学生のモチベーションを高める教育方法をめぐって、教育者の方々のご報告、あるいは実業界の方々からの報告、さらには学生の皆さんからの実践報告など、実に盛り沢山の内容が予定されております。モチベーションを高めるための様々な試みとか秘訣ですとかが、充分明かされるのではないかと期待しております。

本日ご参加の皆さんには最後まで、この新しい教育実践方法にお付き合い願ひまして、ぜひモチベーションを高めて帰っていただければというふうに念願いたしております。本日のシンポジウムの開催に当たりましては、早稲田大学の臨床教育科学研究所、ヒューマンリソース研究所、オーストラリア研究所のご協力を得ておりまして、主宰者として心から御礼を申し上げます。

簡単ではございますが、これをもって開会の辞とさせていただきます。どうもありがとうございました。

(拍手)

**\*司会：**

ありがとうございました。

## 〔 挨拶 〕

深澤良彰

(早稲田大学理事／早稲田大学理工学術院教授)

\*司会：

続きまして早稲田大学理事、深澤良彰よりご挨拶を申し上げます。

皆さん、こんにちは。早稲田大学で研究推進と情報化推進、この2つを担当しております理事の深澤と申します。きょうはお忙しいところをこの「モチベーションを高める教育法－意識変化をもたらす教育の実践シンポジウム」にご参加いただきまして、どうもありがとうございます。

私は、一昨日まで韓国に行っておりました。「韓国の早稲田大学」と言われている高麗大学とか、「韓国の東大」と言われているソウル国立大学とか、いくつかの大学を訪ねまして、先生方を教育するにはどうしたらいいのかということと、もう一つは情報化をうまく取り入れるにはどうしたらいいのかということを見えてまいりました。そのちょっと前には中国に行きまして、北京で同じような目的で視察をしてまいりました。

そこで、感じたことは何かといいますと、韓国の学生も中国の学生もとっても元気がいいんです。うらやましくなりました。先生方に何が違うのだろうか、いろいろな話をしてそこを尋ねてきたのですが、一つは国民性の問題というのがあると思います。日本人はどうしてもシャイな雰囲気というのがあるかと思っています。それ以外に、今回強く感じたのは、大学そのものが積極的に、多少危ないなと思ってもどんどん新しいことを採り入れていく。今回訪問させていただいた韓国のいくつかの大学と早稲田大学では、このスピード感の違いを感じてまいりました。そのスピード感を実現するためにも、我々日本人が持っている意識、それを変えていかなければいけないと思っております。きょうのこの午後半日のシンポジウムが少しでもそういうことにつながれば良いと思っております。では、皆さん、よろしく申し上げます。(拍手)

\*司会：

ありがとうございました。

## ● 趣旨説明 ●

## 開会の挨拶

スタント・カワン

(早稲田大学国際学術院教授・  
早稲田大学臨床教育科学研究所長)

## \*司会：

これより基調講演に移らせていただきます。講演の前に、あわせて本日の研究成果報告会の趣旨をご説明させていただきます。早稲田大学臨床教育科学研究所長、カワン・スタントです。それではスタント先生、よろしく願いいたします。

皆さん、こんにちは。カワン・スタントと申します。よく神様に感謝しまして、今日は素晴らしい天気、今日までの登録者リストとしては136人があって、たぶんこれから続々来ると思います。より一人多く大学生や教員が来てほしいと期待しています。

このシンポジウムの実現に当たっては、もちろん総合研究機構の皆さんがものすごいバックしてくれて、いろいろなご指導してくださったお陰でここまでこられて、本当にありがとうございます。先ほどのお二人の先生が、森原教授と深澤理事の両先生の大サポートがなければ、こういうまったく新しい内容のシンポジウムが、実現することはなかなか難しいと思います。

今回のシンポの内容をいいますと、今まで、アメリカで5年間、日本では丸20年間ですが、最初の10年間は、桐蔭横浜大学、その後の10年は早稲田大学で、それぞれ10年間での教育研究の成果のご報告です。ここでの発表内容は、自信をもって、これから必ず何か歴史に残るものと思っています。

それで、皆さんの、発表する方のリストを見ますと、まったく普通のやる気に関する講演ではなく、やる気の高める方法とそれによって意識の変化に関する現場からの実践報告の発表が多く、もう一方、現場からのレポートであり、特に学部生や元私の講義を取った学生です。日本人だけではなくて、アメリカ人や中国人もあり、企業からもいまして、これからパワーポイントを使って説明をします。もう一つ重要なキーワード「現場主義」ということを私があえてテーマに入れてあります。つまり、教育という研究分野で特に大学教育というジャングルでは理論はたくさんあります。こちらは「実践的」を主にしてあります。もう一つは小学生や中学生というターゲットではなく「大人」である大学生というターゲットであります。今まで日本の研究者が大学生を相手にするのを避けてあります。大学生がやる気がなければそのままにして、大人がやるきがなければ本人の責任です。これらの無感情、無関心、やる気の無い、三つが「無」学生たちを「捨てられる」グループとしていることは、これらの学生は安易に卒業させると、社会の負担になるに違いません。実は大人である学生をケアリングしてあげれば、ちょっと相手の立場にたって、一対一にすれば、彼らの悩みを「本気」に聞いてあげ、彼らを救うことが可能であると考えております。ここに発表してくれる21人の中の18人（86%）の講演者は、スタント・メソッド（STM）やスタント効果（STE）の一部である感動教育（Motivational Education）との関係があり、モチベーションをアップし、意識変化や成長との教育効果が現われる方々や体験者であるのです。

先ほど講演者のリストからは大学の教授、OBOG、現役学生、元官僚、世界的に有名なボクサー、雑誌の編集長、民間会社のそれぞれあります。

これからのゲスト講演者を簡単にご紹介させていただきます。最初は田辺先生です。先生は東工大のMOT

研究科に所属されている先生で、元通産省官僚、13年前の産業構造諮問委員に知り合ってから、私の教育哲学に共鳴してくれた先生で、その後官僚をやめて東京工業大学の教授に変身して若い人の教育と関わり、彼らを影響するための仕事をしてくれました。田辺先生は日本の明るい将来のためにパッションをもたれて先生です。今日はシンガポールに学生を連れて、学生の意識変化のケーススタディを紹介してくれる話をしてくれます。

その次、吉川英治氏です。彼はボクサーで講演を通じて世界の子供たちをやる気やマナーを教えてくれる方です。吉川氏はアメリカで非常に有名なモデレーターです。インスピレーションスピーカーの位置づけです。楽しみにしてください。

その次はコメンテーターの宮崎里司教授で、留学生に関する教育のご講演です、宮崎先生はオーストラリア研究所所長です。

次は、橋本英雄様は丸和運輸機構のトップ役員で、橋本さんが約1万人の社員の教育担当の本部長、そして同社の内モンゴル出身の中国留学生の蘇霞さん、蘇さんは世の中にアメリカンドリームという言葉がよく耳に入りますが、蘇さんはあいにく日本の大不景気の時期に、大変厳しい就職戦線で、いくつかの極端な不利の条件下、留学生、しかも女子、42歳で、所謂就職には無理と言われる「死のカード」の持ち主が、見事に丸和会社の経営本部の部長という役員の職を手にしたので、ジャパンドリームを手にした人物です。まさしくビューティフルストーリーで、本当に奇跡としか言えないでしょう。蘇さんが典型的なスタントメソッドによるスタント効果の顕著者です。今日は前にでてきた橋本様は蘇さんが連れて来られた直属の上司で、約1万人の社員教育本部長、その講演を楽しみにしてください。

宮崎計実さんはグローバルコミュニティー編集部主宰です。4つの言葉（日本語、英語、韓国語、中国語）という珍しい雑誌の編集長。何か大人のモチベーションということで、グーグルとかヤフーなど、「やる気」とのキーワードに、いろいろな方法で私のことを突き止めてくれました。スタントメソッドやスタント効果について定期的に早稲田大学の講義に最初にご本人だけを授業参観をしてくれて、その後日本だけでなく世界の大学の大学生たちを連れてきます。すぐに、スタントのクラスの学生を、一人またひとりをインタビューをしてくれて、宮崎さんの主宰してあるグローバルコミュニティーの雑誌に登場してくれました。もっとたくさん日本人にしてもらいたい。もともと1年のつもりでしたが、今年は早くも3年になります。延べ14人の学生たちの15編の記事を書いてくれました。ここで、深く感謝しております。上記の蘇氏は2回もグローバルコミュニティーの雑誌に登場唯一の人物です。

次は樋口先生が私の理解者ですけれども、同じ国際教養学部国際学術院の教授ですけれども、ヒューマンリソース研究所所長です。この間、シスコとIT関係の世界的な有名な会社のセミナー講座に誘われ、ゲストスピーカーでやったんですけれども、ものすごい面白い試みです。

15分の休憩を挟んで、その次登場するゲストは栄埼さん、栄さんはグローバルコミュニティーに記事になった人物の一人です、7年前の元学生です。Motivation and Education の講義の学生です。まさか7年前、よく私のことを忘れなくて、来たときに、「スタント先生、私のことは覚えてますか」、それで自分の人生、あの講義のお蔭で、有意義なターニングポイントになった。また、先生のスタントメソッドを使って教員になったことがあり、学生たちに大変な人気な教員になり、厳しくても学生たちに大人気です。その後、アメリカに渡り、アメリカで修士号を取ってきました。今でも学生たちとメールのやり取りをしてあります。自分もスタント教授のように、人のために人材教育に関する仕事をしたく考えています。近い将来博士課程に目指し、Ph.Dを取りたいです。今は、働きながらそのための資金などの準備中です。今日の講演タイトル「7年経っても心に残る教授の生徒への思い、夢への道」に関する講演をしてくれます。

このように、7人ゲストと2人のコメンテーターの宮崎教授と樋口教授の9人のゲストによる講演が準備してあります。きっとご満足でしょう。ここまでなら会場の皆様が十分と思われるでしょう。

しかし、このシンポジウムの本当の面白い人生ドラマ（ピック）は実は今からの現役学生による発表です。それは、国際教養学部2年生から4年生の学部生と卒業したばかりの二人のOBOGに含まれてある講演会です。

OGの北村麻里子さんは母校の英語教諭になり、またOBの廣松大和さんは米国の大学院に挑戦する最中の元モンスター学生です。このように12人現役の学生らの実体験からなる「意識変化をもたらす教育の実践報告」です。文字通りの皆様のための本当の多彩なゲストによる早稲田のグローバルシンポジウムと自負することができると思っています。

どうぞこれらのご発表を楽しみにして下さい。

その次は面白い、13人の現役の学生、または卒業したばかりの学生がズラリ。ここ、正直言って早稲田に教えて以来、意識変化をしてくれる学生が実に大勢います。声をかければ100人とかできるはずですけど、時間的に100人の学部生の発表できるシンポジウムはないと思います、時間的に無理です。今回はぎりぎり時間内でできるのはたった12人です。自分の意識変化に関する実体験ですので、一人一人がまったく同じ経験のものがないはずです。文字通り、今回のシンポジウムのテーマに沿って、自分探し、自分変革の素晴らしい内容が盛りたくさんです。よく頭だけを聞くかもしれませんが、今日はぜひ心で、Openマインドを聞いて頂きたいのです。

最後ですが、総勢21人のご発表があるため、時間は足りないんですけども、あえて発表する時間を短くして、また質問の時間が少ないのはどうぞご理解してくださいませ。一人一人の実在人物がいかに変わるか、それが可能であることをぜひ皆さんの頭に焼きつけてください。これは早稲田初、日本初、アメリカでも、ヨーロッパでもまだないのです。中国、東南アジアに行っても講演するとみんなびっくり仰天。なぜならこれは小学校、中学校の話ではないから。聞かれたら、まさか大人である大学生。教室で、しかも瞬時的に大人が、教室に意識が変化できる授業なんて、聞いたことないです。そうです。しかも落ちこぼれ学生、自閉症学生、不登校な学生、モンスター学生などなども、臨床的に目の前に変化を遂げた例ばかりです。正直言って誰も信じませんでした。このように前後日米合わせて25年間を無我夢中にやってきました。アメリカ5年間、日本で20年間を实践して、やっと早稲田大学総合研究機構に認められて、この大舞台、このチャンスで、皆様にご紹介することができます。これは本物の涙、汗の成果だと思っています。皆さんの協力がなければ到底不可能だと思っています。

すみませんが、長々らしく、これで講演者の趣旨説明が終わりました。

## 〔 基 調 講 演 〕

### 感動教育による概念的思考と論理的思考の併用がもたらす学習

－ 意欲の向上及び意識変化の実践報告－

スタント・カワン

(早稲田大学国際学術院教授・  
早稲田大学臨床教育科学研究所長)

それでは、私の発表のところに参りたいと思っております。パワーポイントを使わせてください。

私の講演テーマは、「モチベーションを高める教育法」。モチベーションという言葉は多分50年前、100年前からあるんですけど、科学的な分析させることが大きなテーマです。しかも真似ることができる。そのキーワードが先ほど言ったとおり、意識の変化の実践報告を中心ですので、この発表を聞いてから皆さんの脳に焼きつけられるでしょう。皆さん今の携帯やスマホ、コンピュータの中で使われるソフトは主にマイクロソフトやアンドロイドなどがあります。プログラミングといいます。それらのハイテック機器に嵌っているとなかなか抜け出すことができない人が大勢います。所謂「習癖」になり、悪い「習癖」です。私の昼1時からの講義、いや2時40分の講義でも、遅刻してくる学生が毎年います。理由を聞かれると「起きられないです」、きっと朝までゲームなどで寝られないに違いません。その様なほとんど学校に来ない学生でも、自閉症の学生でも「教育力」で変わり得ると思います。私の今までの25年間の臨床や実践結果は実証しました。しかも、バイアスなしで、どんな民族でも、どういう宗教でも、貧乏な学生でも、どんな国籍な学生でも、教育の背景が違って、自分でさえ納得すれ自分から新しい自分を見つけることができます。それがきょうの40分の話聞いてください。少し私の日本語が下手ですけれども、一生懸命に私が気持ちいっばいで話したいので、皆さんがよく頭で学校の講義を聞くと思われませんが、今日は特別にどうか心の窓を開いて、こういう新しいものがあるということで、少なくとも脳と気持ちを五分五分で聞いてください。重要なのは必ずOpenマインドで聞いて頂ければ大変嬉しい。よろしくお願いします。

これは私の早稲田大学に実施する「感動教育」の一種です。つまり感動力をいかに使うか。私はどうしてここまで考えているか。それは追って説明します。皆さんもわかるように、今、我々の周りに引きこもった人が多くなった。自閉症autism、不登校の学生、面白いのはhikikomoriという日本語が英語になっています。ジャパニーズイングリッシュじゃない、ちゃんとウェスタン、英国で堂々たる百科事典に約4年前に入ってきました。

フリーターという言葉は日本製です。NEETは日本製ではない。これはトニー・ブレア英国首相が作った言葉です。約20年前に英国の問題が起こったときに、NEETは、not in education, Not in employment and Not in any trainingのことを意味しています。つまり、その人は何にもやりたくない。日本では夜中の12時頃やっと自宅からごろごろ出てくる連中達がコンビニに集まりに来ています。この社会現象は、日本だけじゃないんですよ、隣の大きな国の中国でも、一人っ子で、PPTのように、お母さんがこんな年寄りでも自分がすでに「大人」になった青年は赤ちゃん気分でお母さんにおんぶしてもらって「パラサイト」化されています。この写真は中国の世界一大きなメディアで、グーグル社より大きなソーシャルネットワー

ク、「百度」社から引用させていただきました。

次は、アメリカはどうですか。アメリカは歴史的な大不景気の世の中で、1年前に大変なウォールストリートに占領される事件が起こって、皆が記憶新鮮だと思っています。何故かすごい国アメリカなのに、何で1パーセントしかない人が国の富を握っているのか。99%の人は貧乏な生活をします。著名なハーバード大学でも、スタンフォード大学でも卒業をしても、半分以上は仕事がない。しかも二、三年もない。中には、現実には、博士号を持ち、仕事はまったくなく、ポストドクターも三つ終わっても仕事がない。仕事どころじゃない。食べ物のためでも、生活できればどんな仕事がいいです。これがアメリカでの厳しい就職の現実です。

学校教育がもし2割のできる、やる気のある学生、つまりかわいい子、素直に聞いてくれる子、やる気のある人だけを相手にするだけでは、大変困ります。それは教室には2、6、2との割合ですと。もし2だけを相手にすると、真ん中の6割えある人はもう勝手にしろとすればとんでもないです。または、3、4、3、または3、5、2でもいい。最高でもやっぱり2割しかみれないなら実によくはありません。もちろん、今までの現実として2割の人が世界を動かせる可能性があります。こんなエコシステム、環境問題。特に日本は天然資源などのなく人間しかない国だけに考えなければなりません。韓国もそう。もちろん、シンガポールも人的資源しかありません。少しでも2割から3割へ、その次4割の人を相手にしてほしいと思っています。逆に、出来ない人を無視続けると、結局「秋葉原無差別殺人事件」など起こりやすい。この社会問題は中国でも最近たくさん起こっています。私はこれらの人も相手にしています。

大変恐縮ですが、今まで私が何をやってきたか、先ほどご説明があったように、私は運よく4つの博士号を持っています。でも、この4つの博士が、自分の頭がよい、スマートとかどうのこうののではなく、頑張っても仕事がなかったため、挫折で逆境でのお陰だと考えて下さい。当時ちょっと早めに日本に来ちゃったせいで、日本はまだ国際的、外国人に仕事の門が閉まっていた。3人の子供持ちながら、38歳まで給料をもらったことがないんです。そういう悪い時代で日本にいるから仕方ない。中国系である私はインドネシアに帰ると商人しか道がない、公務員にはなれないし、中学の先生にもなれないし、それはインドネシアという国でした。ある時に、通産省の構造諮問委員会に指名されています。私の講演のした後で、ゲスト講演者である田辺先生のお蔭で、日本の21世紀ビジョンにも参加しました。外人として日本初、私にとって非常に光栄です。そのうちにバイオメディカルエンジニアリングという日本初の学科を一人で誕生させました。いろいろ大変ですが、私は常に研究と教育の両立を一貫して実行しています。あまり無理にしてお蔭様で鬱病になっちゃった。3年半で疲れがきちゃった。お蔭様でアメリカではフェロー賞を推薦してくれて、学会の教授のメンバー中の2パーセントか1パーセントしかありません。自己紹介はここまでです。

次、モチベーションを高める教育法について話したいのです。この方法は、最近の20年の間にいろいろな国で、環境、条件の基で実証してきました。日本でまったく異なった二つの大学、桐蔭横浜大学と早稲田大学のそれぞれ10年間の臨床実践してきました。まず桐蔭横浜大学は、運よく理工学部には属するので、都合がいい。どうして都合がいいか。毎日学校で学生と会えます。その学生が自分の研究のため、大体3時間から5時間学校にいてくれるからです。指導教員とのコミュニケーションや切磋琢磨によって学生のそれぞれの自尊心 (Self Esteem) が生まれたし、自信をもって学内外の学会に発表することができます。学生が、研究という目的を達成し、よい結果を残すことで、学生の内面から力、人間力を育つことができました。偏差値はそれほど高くなく、英語も得意ではありません。感想文書かせると、平仮名ばかりの文章。

一人一人のビューティフルストーリーが作りだすことができます。その中に、自分の夢を手にした人、東工大に合格、東大に合格、博士になる人、大学のポストに就く人、などが次々とでていきます。本当に信じられない奇跡だと思います。

また、例えばクウェートからラクダ乗ってるじゃないけれども、Mohamad君はクウェートから派遣されたたった一人の国費留学生として、本当は東大とか東工大に目つぶって入れてくれるはずだが、それでも桐蔭横浜大学に来たいといってくれました。在日本クウェート大使様がわざわざお願いしてきたので、私の創造した日本初のバイオメディカル医用工学科 (Biomedical Engineering) に入学したい。「スタント教授の基に学習や研究をしたい」とのことです。日本の医用機器に関する大企業がたくさんあるのに、なぜかそのための学科が無いのは不思議に思っています。いろいろ調査すると、バイオメディカル工学科は桐蔭横浜大学にしかないことがわかりました。日本の学生と違って、世界からの留学生にとって、米国と同じく、大学の名前ばかりを狙うだけでなく、実績のある先生や研究課題に合う先生、好きな先生の基に研究したいとの要求がよくあります。Mohamadが満足し、次の年、また彼の後輩の国費留学生が入学してきました。

それで、偏差値の低い学生が、モチベーションがうまく高めてから、果たしてどんな研究成果が出せるかについて、皆が知りたいでしょうか。日本の通産省の研究機構であるNEDOの調査、微小気泡造影剤の研究は、1987年から2006年の20年間、スタント研は日本一との結果がでました。ナノマイクロバブル造影剤は医用関係の応用ばかりではなく、海洋、建築材料、河川汚染、ポリマーなどの領域なども使われるらしい。その中では、20年間の論文発表の件数、研究成果、パテントなどの分類では日本一です。一年間で日本一でも大変難しいのに、20年という長いスパンとはびっくりしました。

その上、私だけの良い成果ではなく、私の恩師、助手、二人の博士課程の学生、陳民氏と齊藤氏が、それぞれベスト10に入っています。このように私個人成功すればいいことではなく、いかに我々の団体の各メンバーの成功を常に心がけていて、彼らもトップ10の半分に入っていることが実に感無量です。しかも、自分が早稲田に入って、2009年の時にやっとこのNEDO調査結果がわかりました。

では、これからは、2003年から早稲田大学の国際教養学部属してからの教育活動や研究成果についてお話ししたい。清水さくみ氏が7年前に初めて僕がMotivation and Educationの講義を参加したたった1個の科目でした。卒業してから日本の国際的な大手民間会社に5年間仕事しています。2011年末のある日に、突然一つのメールがきました。「やっぱり先生のお蔭で私の論文2つがあります。オックスフォードの大学院を受験したい。将来先生みたいな人になりたいのです」。いい推薦書を書いてあげ、もし込みをして、まもなくたった1件の大学を応募したのに、まさか一発の合格通知がきました。7年前の講義をよく彼女の将来に役に立つのですね。

もちろん、同級生や同年代の応募者のなかから、研究論文を持っている学部生がほほいないでしょう。当然清水氏がアカデミック的に大変有利条件があるので、順調に英国のトップ大学に合格できました。次にご紹介したいのは並木氏です。並木氏は日経ビジネスオンライン記事の主人公です、「若いうちに心の師を探すことを勧める方」です。後に私の授業のTA (Teaching Assistance) をボランティアしてくれました。栗田氏は感動教育について研究をする。感動というものはアカデミック感動と、心の奥からの感動の二つがあり、科学的な分析してくれました。鈴木ミサ氏は、大変優秀な卒業研究論文をまとめてくれた学生です。鈴木氏は5回ぐらいの国際会議とか、IEEE論文を共同でもっています、スタントメソッドを完全に民族を越えて、スタントメソッドやその効果の実用性についていろんな角度で証明してくれました。清水氏の卒研論文は修士論文や博士論文のレベルがあるといわれています。

次に、斉藤力氏が、成績がよく、講義をとったことがないのですが、卒論にテーマ「スタント講義がどのくらい自分の変化に関する研究」。できれば、就職した企業に応用したいと強く希望したい。最初、私は彼のテーマである「変化」について、疑問を出して、あまりにも大胆すぎるではないかと思っています。つまり、大人である大学生がだれか講義によって、スタントという外国人によって、他人によって、自分が変えられるか、との質問に躊躇するに違いませんと直感的に思っています。少なくとも期待するデータが集まらないと彼にいいました。しかし、斉藤氏の意味が堅く、自分の思いをやり遂げたいとのことです。結局彼が主人公ですから、自分好きなテーマとやり方を許しました。それは無記名で一人一人インタビューをされて、やっている時「教室の知らない学生との会話や質問で、実に楽しい。案外にインタビューという手段は結構友達になれます」と嬉しい報告してくれました。結果としては何と7割の学生が講義によって変化をもたらした。本人がびっくりしてくれました。実は、その学期のすべて4つの講義で、半分の2つが100パーセントが自分が変化し、成長したという調査結果をでました。不思議しながらすごいなあと思っていました。正直言って変化と認めてくれた学生が精々3割ぐらいいればいいと思っていました。

最後のケーススタディの主人公は樋口舞氏について話したい。樋口さんは5年生です。4年前の一年の時に、私のデジタル回路との理工系の講義に初めてであいました。当時は大学に来る意味がなく、学校を辞したいところで、「他の授業は欠席ばかりで、デジタル回路だけが出席する」樋口さんが告白してくれました。文字通りデジタル授業で救われた女学生です。GPA1.0未満から見事に立ち上がれて、イタリア一年交換留学生をうまくでき、日本に戻ってから、スタントゼミに希望してくれました。出会ってから長い4年間を過ごし、今夏学期に卒業したばかりです。研究テーマとその結果は見事に審査つきの香港での国際会議(2012.8)に採用され、後にIEEEの審査つき論文*Inducing Students' Intrinsic Motivation through Conceptual Learning in a Digital Circuit Class*として受理されて今年12月に掲載される予定です。注意すべきことは、3人の論文レビューがいて、珍しく二人がほぼ満点を評価してくれました。さすがに本人も大驚きをし、自信がついたとの嬉しい感想文を書いてくれました。この結果によってかなりやる気の無かった樋口氏もモチベーションを上げることに成功し、卒業論文のスタントメソッドによる概念的な思考に関する研究は、科学的に世界的に認められてくれました。

このようにして、上記のGPA4.0の学部長アワードの鈴木みさ氏でも、GPA1.0未満の樋口舞氏の大学の勉強が大嫌いだったが、大学の成績が最高と最低の大きく異なった二人早大生がスタントメソッドによって、学部生にも関わらず、世界的に認められる科学論文を創り出すことが可能であることを実証できました。

私が週に平均5つの異なる科目を教えています。やる気のない学生が度々出会います。「先生、助けてください、私はやる気がない、学校に来て何もわからない」と最初の講義の感想文が書かれてあります。最近そういうレベルや悩みの学生がよく出てきてくれます。いったいどんなプロセスを踏んで彼らを救いますかとの疑問を解けるには、まず、スタントメソッドがどういうものか。私にとって「教育」は教えるだけでなく、育てることも含まれています。大勢の先生たちが育てるについて忘れたのではないか。だから教育の「教」は教える、そして「育」は育てる。教える育てるとのことです。もし、その人の置かれるレベルは1.0であれば、如何にして1.1にし、その次更なる成長の1.2にさせる必要があります。「成長」とのキーワードをぜひ忘れてはだめですね。これが私の教育哲学です。

それでは、授業を通して学生のやる気をもたせて、学習意欲が高められるかどうかは、もう一つのケーススタディをご紹介します。読売新聞のある記者が「モチベーション、道徳、人間力について大学レベルの実践例や研究をほとんど見当たらない、残念ですが現場でちゃんと実績があるのは早大のスタント教授だけです」と寂しげに調査結果を教えてくださいました。あるのは小学生に対するモチベーショ

ンや道徳です。スタントメソッドの一つの手法として感想文を書かせることです。しかも20年間の日本でのすべての講義に徹底的に一貫的に書かせてもらって、一度も忘れたことがないんです。一旦感想文をもらって必ずフィードバックをします。そこからいかに小さな、ちょっとした変化が見つけ出し、感想文にマークし、週ごとに各人の変化を記録して、何か個人的に、教室の感心度、そして社会的に対する考え方の変化があるかどうか、そして教養力や人間力を高めることがあるかどうかを観察しています。本教育法による各々学生の意識変化をもたらすプロセスとその結果を記録します。

読売新聞の5つ連載記事がありますが、東大でも大阪大学でも慶応大学、早稲田大学、でも、最近にカウンセリングが欲しいとの要求が増えてあります。不登校や授業に出たくない学生に対して、いろんな工夫をし、ただでコーヒーを飲ませる大学を紹介する記事ありあります。早い話とはにかく大学に来てください。如何に今の大学生が学校に来たがらないのはわかります。問題はただでコーヒーを飲んでから、そのまま家へ帰ります。それが実情です。教室にちゃんと講義に参加するまでしなくて新聞に載ったのも寂しい。単なる学校に来させるだけではまだまだ目的を達成してありません。

この2012年、大学に行っても何をやるかわからない。どうせ単位が取れるから、就職しなくてもいい。何で大学に来たかわからない。エリート大学と呼ばれる大学でもそうやってきます。多くの大学生がやる気を失っているのは当今の日本の多く大学があります。感想文に銘々に書き、自己紹介で堂々と人の前に言ってくれました。読売新聞5月12日の記事について話したい。

学生の名前は阿部君です。彼についての詳しい内容はどうぞ私のレジюмеをご参照してください。阿部君は希望を抱いて目標の早稲田大学に見事に合格して進学しました。一年生の最初学期で授業をまじめに出ても、残念ながら自分の意欲がなくて大変困っています。ぶらぶらしてどうしようもなく、生きる勇気まで失っていてとうとう自殺までもしたい。夏休み時にあいにくマンションで意識不明になりました。一応新聞にはごみの山に倒れたとして書いてあります。本当の話は意識不明でした。運よく彼のお父さんが、何回か電話をしたのに、ぜんぜん返事も返ってこなく、おかしいと思ったご両親は、三重県から車で走ってきて、マンションをロックしても返事がなく、ドアを合鍵であけたら、ああ、意識不明の長男阿部君を意識不明でした。間一髪で彼を救われました。そうでなければもう亡くなっていたでしょう。

阿部君は、如何にして立ち直ったか。三重県の自宅で何日か意識不明後。起きたときに、「何でおれはここにいますか」と驚きながらお母さん、お父さんに質問をしました。

私は「私はあなたをあきらめない」との100パーセントの学生を相手にする教育哲学が持ちます。阿部君のような人が目に見えるほどいます。彼らはなぜ私の一番厳しい講義を挑戦にきたか、その理由はまちまちですが、一つは、一応、何となくモチベーションという言葉があるから私の講義を聴きにきました。一方シラバスをぜんぜん見なくて、時間的にちょうど学校にくる時間で、ちょうど開いているから、その次は、「先生、私を助けてください」との期待感をもつ学生もいます。

私は初日の講義でも本気でこういう熱の高い話し方をしますと、阿部君が「まさか、1回目の講義でこんな熱い話をしてくれた先生がいるなって」とびっくりした彼は「スタント先生は学部で一番いい授業をしてくると思います」、と一回目の授業で彼を立ち直ったんです。ほとんど夢物語みたいですね。でも実際に起こったReal Storyです。

つまり、私の本気度に驚いたわけね。お蔭様で、最初は4人だったが1人が消えて3人になったが、また1人が3回も遅刻して、欠席もするし、この女学生が来なくなりました。あと2人だけの「アジアの高等教育」です。阿部君と津江君の二人だけの授業になります。時間の関係で、阿部君の話も蘇霞さんのご発表に出てくると思います、蘇さんが阿部君をインタビューしました。

阿部君が変わっただけではなくて、周りの子ども、引きこもった人をいましたが、2012秋学期で目の前に座っているちょっと雰囲気が変わっている学生がいて、自己紹介させると「私は阿部君の紹介で、何か助けしてくれるからと。いや、ちょっと引きこもって、1年間学校に来なかった。学校より毎日家にいます。先生だけの講義を今試してみます」とびっくりしました。

もう一度いいますと、なぜ彼らは変わったか。いかに学習意欲を奮い立たせるのか。結局、先生の教育力によるものです。知識だけでうんざりかもしれません。一方的に教えるだけではなくて、何か感じてほしい。2年を一貫してスタントメソッドによる教育をしています。

まとめの一つは、大学で感動教育による感動が体験できたら、その人間が無意識的に新しいものを受け入れられます。大学での感動体験がなければ、やっぱり学生の学力低下、無関心、無感動の学生になりやすくと思っています。一週間にたった一回か、二回学校に来れば大学を卒業できるから、簡単らしい。そういう学生が実際にごろごろいます。

まとめの2は、スタントメソッドはただモチベーションをあげるものではなく、20年以来理解者や共鳴者が結構います。しかし、その中に、「やる気のある人にだけを相手にします」との考え方は、結局2割のできる学生に授業を行っています。これは問題ですね。

中国の諺があります。「すべての学生を教えられるが、教えないのは先生のせいです」、教えられないではなく教えたくないでしょうか。完全に問題学生ややる気の無い学生を放棄してますね。日本だけの問題ではなく、世界の問題です。

次は、スタントメソッドのもっとも大事の一つは「リアルストーリー」です。できれば先生のご自分の体験談が望ましい。双方向コミュニケーションが生まれます。阿部君の最初の講義の感想文には、「スタント先生が国際学部が一番優秀なすごい先生だね、こんな熱い先生は見たことない」、僕はびっくりした。

阿部君を教えるだけでなく育てる気持ちが新聞の記事に書いてあります。記者によると「教える育てるを本気に実行し、阿部君のような教育効果が生むことができることは、大変なこと」とやっとわかりました。教える育てるとの教育理念は日本ではほとんどの先生が実行してないらしい。それだけではないが、前の桐蔭横浜大学で、12年前にも日経ビジネスの記事になっています。私のマイクロバブルのアメリカの特許と日本の特許があります。その記事の後ろ部分に書いてあるのは「熱心な教育者であって、学校内で一番厳しくても学校で一番人気です。触発学生が多く」。また、恐縮で手前味噌ですが、理事長や学生による授業評価で、7年間連続桐蔭横浜大学の人気一番の教員に選ばれて、本当に光栄です。

このPPTは、田辺先生のお蔭で「人材教育」の雑誌のカバーになりました。「人材教育の成功秘密、時には厳しく叱るによる指導方法」、ほめるだけでは壁にぶつかるでしょうね。このPPTは有馬大臣も訪問してくれました。その時は「心を育てる」ことについて結構メモになって、そのうちの参議院の議事録にでて、グーグルに調べられます。

このPPTはスタントメソッドの7番ですが、学生たちに感想文を書かせても、それを徹底的に見ないと、学生がいかに変化するか、ちょっとだけの変化を見抜ければ大変なことになります。ちょっとでも変化や成長をみつけるとほめてあげます。いくら大人の大学生もやっぱり見てくれる先生がいると嬉しい。例えば、前に述べた樋口舞氏の科学的なIEEE論文になったのは、学生たちの感想文をよく分析することから生まれたアイデアです。概念的なコンセプチュアルシンキング、つまり右脳が発達することによって、クリティカルシンキング、イノベーション、クリエイター、そういうものが生まれる。感想文から学生らの人間力が成長することがわかります。教育に反映できるのはなかなかないと思う。お蔭様でスタントゼミによって見つけました。一人ひとりの学生が成長してくれるのを実に面白いですね。

感想文から実際に概念的な表現が増えます。人間関係、希望、自分の感情、人のために、などがあります。スパイラル効果と思ってすぐ反応して、だから感想文をただ書かせて、その有効な評価をしないと、せつかくの情報が無駄になっています。学生のやる気が泡になります。

感想文は、例えば最初の5行での英語は、大体40語であります。週ごとにだんだん増えるんですよ。これは面白いね、やる気が出てきましたね、定量的に評価でします。そうする内に、プラスな思考がだんだん増えています。嬉しいのは私の担当した全ての講義に言えます。

では、概念的な学習は、自分が成長することはもちろん大事だが、その内その学生がプロアクティブになり、人を助け、人を希望持たせ、自分のより生きる方、自信などなどの言葉がだんだん増えます。大人が教室で成長できれば、もし小学校から中学校までがこのような教育法で育ててくれればいいなと思っています。もちろん年齢と無関係で、私のファンが88歳の人が出てきたから。

それでは、もう一つの例を言います。例えば人のために一番多いですけど、モチベーションとか、こういう言葉が次々に出て、これは5年間の成果です。では、昨日の感想文をまとめて、例えばその後発表する予定の廣松大和氏、よく聞いてください。2日前に私の教室に練習をしないと7分の発表ができないのではと思っています。練習するときには、やっぱり時間が大きく超過しました。しかし、廣松氏がご自分がモンスター学生であることを認めての発表は聞く学生たち皆が大変驚きながら、深く感動しました。「モンスター学生や阿部君と私もそう、皆が先生の授業で見事に変わりました。」と津江氏が感想文に書いています。廣松先輩がモンスター学生だったのか。やっぱり廣松さんが偉い、I'm in the same situation. 私と同じモンスター学生でした。私は彼と会って面白く思っています。

自分を探しや自分が変化する学生が続々とでてきます。だからやる気のないを無視するとこんな物語はでてこないのです。

次は、廣松氏のことではないが、興侶氏の発表です、最後が期待してください。教育するだけ育てられる。週ごとにどんどん影響していました。

実は、伝染っていつも悪いことだけが伝染します。いいことでも波及して伝染しています。英語で contagion、前に話した5月12日の阿部君の読売記事ですが、すぐに他の大学の学生に伝染し「今日は私は大学に行くぞ」と影響をしていますね。

これは復習です。本を読んで何かスタントメソッドは、例えば、平凡教師はただしゃべる。良い教師は一生懸命を見せます、優れた教師は自らを見せて、しかし、偉大な教師は心に火をつける。これはウィリアム・アンサーの言葉ですけれども、This is the Soetanto method! 私は人をどうやってインスパイアするか、常に考えています。また大変恐縮ですが、人は私の講演を聞いて、本をよんで「これは吉田松蔭とよく似ている人だ」といわれました。

日本で大人気の教育ドラマ、金八先生があるが、作り話だそうです。実は私の日経新聞のタイトルが、「平成の金八先生が外国人のスタント先生」。日経ビジネスなので、ビジネスらしいタイトルの方がいいので、別のタイトル「異能の大学教授カワン・スタントの直伝、本気が作るやる気人間」になった。

記事には私は人の心に火をつけるために、感心な指導者である自分が熱くないと、聞く側の学生を熱くすることが難しいでしょう。自分が興奮していると相手も興奮しやすい。これもスタントメソッドの一部です。自分のテンションが相手に伝わり、相手のテンションも引き上げるのです。ある種、共鳴現象です。これは秘密、ノウハウです。これらのことが本に書いてあります。どうぞ手にしてご覧になってください。

次、やる気のない学生をやる気にさせる。学生が次々と燃える、変心させるのは何だろう。やっぱり教授が燃える心に共鳴させるというマジックだと思います。私は淡々と、冷静に、何の感情もないと、絶対

に聞く側の学生に伝わらない。アメリカに600人の成功者の社長さんのインタビューをまとめた本があります。最初に、成功する重要な要素はパッションです。パッションがないと何が教育できるか。教育者になるにはただ試験に通って教員のライセンスを取ってできる。一方的に話すだけでは、人間は育たないと思います。成長はありません。

本を読んで、こんな感想文を寄せてくれました。「うちの孫がこれから受験する。先生の本を読ませています」と正の循環とよい影響が次々に出ています。また一つの方法が全身全霊で本気で教え込めばきっとそれなりの結果がでます。

また、研究と教育を両立するのは至難の技です。それでも、若い人を教育しないと、自分の研究をするだけでいいのか。

それでは、今の教育は何が間違ってるの、私は今の学校教育は知識しかを教えない。よく成功するためには一生懸命に受験勉強し、試験をパスし、医者になって、弁護士になって、会計士になって、でも幸せの気持ちがあまりありません。実は、知識があって、その次は技能があれば成功すると言われますが、しかしそれでもまだ不足だと、その次は考えるのはやっぱり「人間力」ですね。実は20年前にも考えました。その新聞ですね。読売新聞半ページぐらいで出してくれました。こういう本が、日本だけでなく、お蔭様で母国インドネシアで国民的な英雄、手前味噌じゃないけど、お蔭で、インドネシアで一人で歩けないぐらいになっています。(笑い)

スタント効果と言っていますが、お蔭様で日経ビジネスの2008年から2009年まで、最初は3回の記事だけど、毎度が一番になって、すごいインパクトを与え、タイトルは「本気が作るやる気人間」です。日経新聞にとって教育関係の記事はマイナーだけに、まさかビジネス世界で人気一番の記事になったんです。実に光栄です。

もう少し毎回の記事の読者の反応をみましょうか。グラフから「ほとんどあまり読まない」は2パーセント、合わせて3パーセントでした。日経ビジネスの歴史では初めての快挙らしいです。このPPTは人気一番の証拠です。読者が選んでくれた人気一番です。また、別の記事も、一番です。こうなりますと、日経ビジネスオンラインの年末年始の勉強会、私の写真付きでの記事を選ばれて、「火をつけられる人が作り」、100年に一度のリーマン・ショックの大不景気時代にぜひ呼んでほしい記事として選ばれました。非常に光栄です。

最後ですが、「学校に入ったのは何のためですか。仕事のためですか」。ある読者の感想文「スタント氏の日経コラムを詠んで、自分が学生の内に何を探究するだろう、自分が学んだことが、やりたいことがやればいいのか。単純に考えて学生生活をした。今卒業してからの20年間、スタント先生のコラムを見て、もっと大学にどっぷり浸かればよかったと痛感しました。すべてのことから学ぶことができるわけですが、教授の生き方、生き様から影響を受ける、すばらしいことです。だから子供もぜひ早稲田に入ってもらいたい。スタント教授の講義に出会ってほしい」と感激的な感想文に頂き、感謝しています。

スタントメソッドは別に珍しくないんです。実は2,500年前の老子の教えが、「知識より意識の方が大切」。我々の人間の先輩がとっくにわかっていました。忘れかけている大事なものをすっかりものにしたのです。それで教育って押しつけられるものはうまくいきません。だから intrinsic motivation 内的動機づけが必要です。

ご清聴ありがとうございました。(拍手)

\*司会： ありがとうございました。

## 意識変化の触媒となる授業

### Lecture catalyzing students mind transformation

#### \*司会:

これよりゲストの皆様による報告を始めさせていただきます。初めに、東京工業大学イノベーションマネジメント研究科教授、田辺孝二様からご報告をいただきます。それでは田辺様、よろしくお願いいたします。

私は「意識変化の触媒となる授業」というテーマで、私が早稲田大学で11年間やってきた「シンガポールのITと社会」という授業について報告いたします。ITは情報通信技術のことで、シンガポールではInfocomm Technologyと言っています。この授業は2001年にスタートしました。メディアネットワークセンターが実施している情報化教育科目の一つです。そのため、全学の学生が受講でき、いろいろな学部から異なった学年の学生が受講しています。最近、大学院修士課程の学生の受講も増えています。

この授業を始めた時は経済産業省に勤めながら授業を担当しましたので、土曜日の二限目に行っています。この授業はパナソニックシステムソリューションズジャパン社の寄付講座として実施されています。この授業を開講したそもそもの発端ですが、シンガポールのITが面白いということを私が話していたところ、パナソニックから寄付を得て設立された早稲田大学シンガポールIT戦略研究所の活動の一環として「シンガポールのIT」について授業を実施することになったものです。

これまでに、毎学期30人程度が受講しており、延受講生は約600人です。スタート当初は1年間の授業でしたが、4年前から前期と後期に分けて、前期が「シンガポールのITと社会」、後期が「アジアのITと社会」としています。なぜ1年間の授業として実施したかといいますと、夏休みにシンガポールで現地研修を実施すること、その活動結果を後学期の授業で報告し、学生間で共有することを考えたからです。ただ、1年間通して同じ日時に受講するのは学生にとって大変ですので、前期、後期に分けました。

今回この授業を「意識変化の触媒となる授業」として取り上げるのかということですが、受講する学生の多くから、約半分ぐらいの学生から、もっと早くこの授業を受ければよかったという受講後の感想を得ています。4年生の場合は、この授業を受けて刺激を受けて、社会に出ていくことができ、それはそれでいいと思いますが、「もっと早く受ければ有意義な大学生活を過ごすことができたのに………」という感想を言う学生が多いのです。例えば、今年の前期に受講した学生の中に、「4年間受けた授業の中でこの授業が一番よかった」と言う学生がいました。なぜそういう感想がでてくるのかを、皆さんに考えていただくために紹介するものです。

授業の内容は、シンガポールを取り上げて、シンガポールがIT（情報通信技術）を使って社会を変えてきたことや、自分たちの未来を創る政策をいかに構想・実現してきたかについて紹介します。シンガポールからのオンライン授業では、政府専門家やシンガポールで働く日本人を講師に招き、講演をしていただくとともに、意見交換をします。シンガポールは、今、国際競争力が米国と競う世界一、二位にあり、ITの利用についても世界トップレベルで発展しています。授業の目的は、第一に、シンガポールを通して今の日本を考えるとともに、将来の日本を考えてほしいということ、第二に、ITを活用する本質を理

解してほしいこと、単に人がやっていることをコンピュータに置き換えるだけではなく、ITを使って新たな価値を創造する社会イノベーションだということ、第三に、自分たちの社会を変える、自分たちの未来を創ることができるということを理解してほしいことです。社会の未来だけではなくて、自分の未来を創ってほしいという考えでやっています。

ここでシンガポールのイメージを掴んでいただくために、いくつか写真をお見せします。これはシンガポールのビジネス街の写真です。シンガポールは小さな国で、人口500万人です。面積は東京23区ぐらいの大きさです。次に、ITの利用事例である貿易手続システムTradeNetを紹介します。輸出や輸入をしようとする際に、政府機関に各種の申請手続きを行います。それをペーパーレスで24時間365日申請できるシステムで、電子政府のシステムです。政府に提出しなければいけない書類をまさにオンライン（ペーパーレス）で送ると、数分で審査結果が返ってきます。電子申請、電子審査、電子承認のシステムです。日本と大きく違うのは審査と承認をシステムが行っている点で、日本ではオンラインで提出しますが、審査は人間が行っています。こういう電子申請・電子審査・電子承認のシステムによって、銀行のATMと同じように、24時間政府が開いている、申請の処理をしてくれるという政府、電子政府を実現しています。空港や港も24時間稼働していますので、企業は速やかに貿易を行うことができます。企業は手続の時間や労力が短縮でき、貨物の保管も短縮できますので、コストが削減できるとともに、顧客の要望にスピーディに対応できます。まさに政府がビジネスを支援する環境ができており、ビジネスの邪魔をしない政府ということを実現しているのです。

次の事例は、電子道路課金システム（ERP）です。日本の高速道路のETCと同じように無線でICカードから料金を徴収する方式ですが、シンガポールは都心の混雑解消のために出勤や退社の混雑時間帯に通行する車に対して課金するものです。このシステムは日本のETCとは異なり、システムが稼働した1998年に国内のすべての車に無料でICカード搭載装置を配布し、それ以降の新車に同装置の配備を義務づけており、すべての車を対象としています。都心に入る道路毎に、混雑に応じて5分刻みで異なる課金がなされ、混雑時は2ドル程度、混雑が緩和する時間帯は1ドル50セントに安くするなど、混雑度に応じた料金が設定されており、都心の道路混雑を調整する役割を果たしています。課金の金額は3カ月ごとに見直しています。このシステムは日本企業がシンガポール政府から受託して構築したもので、日本の技術で開発されたものですが、日本のETCと異なり、すべての車を対象に混雑度に応じて課金することによって交通混雑をコントロールするという新しい価値を創ったもので、まさに社会イノベーションです。以上、「シンガポールのITと社会」の授業の一端を紹介しました。

この授業では、シンガポールがITを使って自分たちの社会の活力や魅力を高めていることを伝えていますので、授業自体にもITを活用しています。テレビ会議システムを使って、シンガポールから講師が授業を行うオンライン授業を授業15回のうち3、4回は行っています。受講する学生との連絡やレポート提出は早稲田大学が用意しているコースナビという授業支援システムを使っています。

授業にはグループ活動を取り入れています。受講生を希望のテーマごとに、4～6人のグループに分けて、5月、6月にかけて、シンガポールの教育制度やIT活用などについて、自分たちで調査をして、授業で発表をするということをやっています。このグループ活動を通じて、学部や学年を超えた交流ができます。また、シンガポールからの留学生との交流を授業で行い、互いに質問したり、意見交換します。さらに、受講生のうち希望者を対象に、8月下旬と9月中旬の2回に分けてシンガポールへの現地調査を実施しています。現地調査では、現地企業や政府機関への訪問、シンガポール国立大学の学生との交流などを行っています。

では、今年の授業の具体的な内容を紹介します。オンライン授業では、シンガポール日本人会事務局長にシンガポール社会の最近の動向を、現地調査会社の日本人社長からはシンガポールにおける日本企業の活動状況について話していただきました。また、シンガポール政府機関である国際企業庁と経済開発庁の日本代表を務めている方々に教室にお出でいただき、シンガポール政府のグローバル政策や経済開発政策について講演していただきました。お二人の代表の方々は30才前後で、ともに日本に留学された方々で日本語が堪能です。シンガポール政府の留学制度で日本に留学し、卒業後に帰国し政府機関で働いた後に、30才前後で日本に赴任し代表を務めています。

グループ発表は2日に分けて、すべてのグループに発表してもらいました。シンガポールからの留学生3人との交流では、留学生から「何で日本の学生は自分の本音を言わないのか。自分の好き嫌いをはっきり言わないと、親友ができるわけがないじゃないか」という質問があったのはショッキングでした。当たり障りのないことしか言わないという面もありますが、日本人のある種の思いやり、日本とシンガポールの文化の違いもあることが判りました。飲み会の後で、「また行きましようと言われたけど、二度と誘えない」とシンガポール留学生が言っていました。これは文化の違いかもしれません。

現地研修については、今年の8月と9月に、それぞれ7人と9人の学生が参加して実施しました。現地に4日間ほど滞在し、シンガポール大学が運営するデジタルメディア関係のインキュベーション施設を見学したり、メディア開発庁が運営するコンテンツ産業振興施設を見学するとともに、シンガポール国立大学の日本語授業に参加したり、Biopolisというバイオ研究拠点にある早稲田大学バイオ研究所の訪問、パナソニックのアジア太平洋地域本社への訪問などを行いました。

現地研修の写真を紹介しますと、この写真はシンガポール大学が運営しているデジタルメディア関係のベンチャーのインキュベーション施設です。この人は東工大のOBで昨年まで情報通信開発庁に勤めていた方ですが、早稲田大学とナンヤン工科大学が共同で実施しているビジネススクールを修了した30代の方ですが、このインキュベーション施設に入居しているベンチャー企業を昨年立ち上げました。この写真はシンガポール大学の日本語の授業風景です。早稲田大学の学生二人とシンガポール大学生三、四名がグループを形成し、互いに印象に残った新聞記事を持ち寄り、ディスカッションをしてグループごとに発表をするという授業を行いました。

最後に、受講した学生の感想・意見を紹介します。最後の授業に学生が書いたものです意識が変わったというものを取り上げました。「日本の内に閉じこもることなく、世界で活躍しようという気持ちを奮い立たせる授業だった」、「良い意味での焦りと刺激を受けた。日々視野をグローバルに持たなければならぬと強く感じた」、「海外で活躍できる人材になりたいと思った」、「社会に出て変化をもたらして行きたいと思った」、「代替不能な“個人”になりたいと強く思った」、「より良い社会の仕組みを創れるリーダーになっていけるよう日々精進していきたい」、「“現状維持は衰退”を今後心にとどめ、自分のVisionを実現するよう努力し続けたい」、「“絶えずチャレンジし、未来を創っている”はとても印象的な言葉だった。今後の生活、私の未来に活かしていきたい」などです。

この授業を通して意識変化が起きた理由としては、次のようなことが考えられます。

- ・知識提供ではなく、意識を変えることを目的とした授業 であること
- ・日本と異なる発想・構想でチャレンジしているシンガポールから刺激を受けること
- ・グローバルに活躍している講師・ゲストから刺激を受けること
- ・多様な感性・意識を持つ学生がグループワークなどでお互いに刺激すること
- ・シンガポールの学生との交流による刺激があったこと

シンガポールと日本は発想などいろいろ違ってきます。シンガポールは大きな危機感を持っています。小さな国ですし、日本以上にリソースがないわけです。その危機感の中でシンガポールは様々なチャレンジしています。その一つがITを活用したシンガポールの変革であり、そうしたチャレンジから受講生が大きな刺激を受けているのです。

以上が「意識変化の触媒となる授業」の「シンガポールのITと社会」の紹介です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

**\*司会：**

ありがとうございました。

## 夢はありますか？ 夢がある人の人生、ない人の人生

\*司会：

続きまして、国際ビジネス誌編集長であり、世直しボクサーとしても活躍中の吉川英治様からご報告をいただきます。それでは吉川様、よろしくお願いいたします。

(ビデオ)

どうも。もうちょっと拍手があった方がいいな (笑)。ビデオの方が格好いいね。いいこと言ってるしね。さっきから引きこもりとか、そういうのがあって、おれのところにもいっぱい話がきて、学校の先生が、学級崩壊だから、いじめがあるから来て直してくれという電話がよくあるんですけど、行かないって。だって、あんたらプロだろ、お金もらってんでしょ、職業でしょ、毎日会ってんでしょ、やれよって。何でおれが500キロ離れた所から行って1時間で直すんだ、人のせいにしやがって、と言うんですけどね。

あと、よく、うちの子は引きこもりでどうにかしたいとかいうお父さんやお母さんに言うんだけど、あんただって日本に引きこもってるんでしょって。そう、人を正そうとか、人を変えようなんていう前に自分を変えなければ全然話にならないわけであって。

きょうは大学生いないかな、ここ。何かおじさんばかりだな。まあいいや、大学4年とか行くの偉いなと思って。おれ、幼稚園から小学校に入ったときに、小学校は6年間だといわれたときに、6年ってどれぐらい長いんだろうってわかんなくて。でも、がんばって毎日行ったの。で、1カ月たったときに、当時は土曜日まで授業があったから、朝から晩まで、とにかく人のやる気を完全にだめにしてくれる先生たちのオンパレードで、1カ月行ったときに、これはまずいと思った。クラスに1月から12月までのカレンダーがあったから、これを12回やって、それで1年、それを6倍してやっと小学校終わる。その次に中学がまた3年。それを聞いておれは、これはいかんと思ってあることを始めたんですけど、夜寝るときに布団を敷いて、布団のところで手を合わせてね、神様、でっかい台風でおれの学校を吹っ飛ばしてください。そうやって祈って、台風はいっぱい来たんだけど、窓を開けると地平線に学校が建っててね、あーと。でもまあ給食と体育があるから行くかつって行って。

後から人が教えてくれたんですけど、役所の人。吉川さんね、うちの町の百何年かの歴史で、保育園から高校まで皆勤賞はあんただけなんだと言ってきて、1秒も欠けたことないんですよ。それがすごいかという全然すごなくて、生きることは殺すこと、寿司屋に行ったら、魚を食べて殺してるし、チキンも好きだし、だからといって肉食主義にしたって、シャンプーや石鹸でいっぱいバクテリア、人間の命の礎を絶ってる。だから、生きてるからには絶対に地球のために、世界のために役立って死なないと、ただの食い逃げ人生になっちゃう。

だからといって、どんなにがんばっても1つの命さえ取り返すことはできない。飯の上に乗った500匹のチリメンジャコの赤ちゃん、あんなの食うのやめてほしいけど、赤ちゃんの命を取り返すことはできない。だからこそ、力いっぱい地球のために働いてから死なないと不公平なんでね。

だから、おれは歩くときね、普通の人はいくつ歩いて歩くけど、おれの歩き方って、こうやって蟻を踏まないように歩いてるんですよ。蟻さんかわいそうだから、セメントの犠牲者だから、あれが地面だったら死ななくていいのに、人間が勝手にセメントだのコンクリートだの作って。

それから、人に、おばあちゃんが立ってるのに優先席でサラリーマンが漫画読んでる。それに、こらどけと席を替わらせたらね、そういうのをやってたら、おれは何か偉い人だとかってテレビに出るようになって、それは絶対におかしい。そんなの当たり前だって、そんな当たりの最低限のことさえないのにどうして正義ができるか。一番レベルの低いことしかおれはやってないのにそんなになっちゃって。

で、ビデオとか見るとよく勘違いされるんですけどね、吉川ってやつは勇気があるとか、そういうふうには思われちゃうんですけど、全然大間違いで、ジムに行ってた日々、当時、自分の先輩は具志堅さんで世界チャンピオンで、渡嘉敷とか一緒にやってて、世界チャンピオンが3人、日本チャンピオンが5人ぐらいいるジムで、毎日殴られて、自分の血で真っ赤っ赤になるんですよ、シャツが、自分の血ばっかり。で、もうジムに行くのが嫌で嫌で嫌で嫌で、朝から晩までおれが何をやってるかという、ジムに行かない言い訳を考えてるんですよ。ああ、首が痛い、顎が外れてる、ああ、足の裏むけてる、拳が潰れてる、背中がかゆい。何でもいいんですよ、一日中考えてて。でも、最後に定期入れにある言葉を入れてて、それを読んで、ああ、行くしかねえわと覚悟を決めてジムに殴られに行ってたんですけど、その時の言葉の裏話にとってもいいことがあるけど、それを話すと30分かかるからやめて、とにかく言葉を紹介しましょう。

どういう言葉を読んでジムに行ったか。

「不可能な夢を見る。かなわない敵に挑む。耐えられない悲しみに耐える。勇者でさえ行かない場所におれは行く。正せそうもない不正を直す。遠くの知らない国の知らない人のことも愛する。へ口へ口になっちゃって下がった手も持ち上げるんだ、あの星に届くために。これがおれの道。あの星が目がけること。遠過ぎるなんて関係ない。不可能なんて気にしない。正義は1つ、正義のために戦う。躊躇なんか全然しない。高い、高い理想のためには、低い、低い地獄に入ろう。そういう目標を持って生きていかないと、おれは棺桶に入ったときにちゃんと眠れやしないんだ。それで世界はほんのちょっとだけ良くなる。このちっぽけなやつが、木端微塵に倒されて、そこに朽ち果てても、それで世界はほんのちょっと良くなる。最後の1グラムの勇気は搾り切って、使い切っちゃう。あの星に届くために。これがおれの道。」

人を注意してね、恐くないか、刺されたりするぞって。それは恐くない。でも、おれはとっても恐いから、勇気があるからじゃなくて、とても恐いから注意してるんだ。ほら、サラリーマン立てとか、おっさん歩きタバコするんじゃないって、おれは刺されて死ぬことよりも、こんな人間になることが嫌なんだ、精神の死が嫌なんだ。文句を言っておれが損したら嫌だから言うのを止めようって、そんな人間になっておれは生きていたくない。自分が可愛いから、それは黙っていよう。そんな人間だったらおれは絶対生きていたくないね。だから、そういう意味で、おれは心が死ぬのがすごく恐くて注意してるんです。心の話、スタント教授もさっき言いましたけど、人間で一番大事なものは心。心に、心を一番増やして、熱くして、でかくする。そうすると、そこから脳みそや、心臓や、体に栄養が行くわけであって、その反対をよくやってるからね、心は殺しちゃえみたいな。それは大間違い。心を満杯にすれば全部伸びちゃう。

うちのボクシングジムで選手や生徒たちに、もっとやれ、もっと行けなんて言ったことはおれは一回もないんですよ。だって、みんなやりたいんだから、やりたくなっちゃってるんだから。ここに来れば夢は叶うと信じてるんだから。むしろ、おまえそんなにやらなくていいよとブレーキをかけるぐらい。そのぐらいみんなやる。おれは楽なコーチしてたな。

あんまり学生がいらないから言い甲斐がないけど、There is nothing to lose, nothing to lose. みんな失うもの

がいっぱいあるように生きてるけど、失うものなんか絶対にない。絶対にない。生き切らないと。それで、何かをやるときに、おれは絶対に自分を疑ったことがないね。絶対できると信じてやる、何をやる時も絶対できると信じてやる。で、自分を信じられなくなったら人生はない。自分を信じられない人に人生はない。それから、自分を信じることはどういうことだというと、できない人というのは結局は自分への探究がない。自分の探究をとことん、命をかけてやらない限り、永遠にだめ。本を1,000冊読んでもだめ、講義を1,000回聞いてもだめ。自分の探究。で、自分の探究はどうするかというと、部屋にこもっちゃいけない、世界に行かないと自分は見えない。だから、逆のようだけど同じなわけね。自分を知るためには世界を見ないと不可能。

最後の方に早稲田の人がしゃべるといったから、そっちをすごい楽しみだな。その中の人でうち、外国の出版社とかやってるけど、誰か二、三人、人を雇いたいと思ってるから頼むよ、手伝ってくれ。それで、やる気を持った人なら何にしてもうまくいくからね、信じてるから頼むよ。どうも、ありがとうございました。(拍手)

**\*司会：**

ありがとうございました。

## 〔コメンテータ〕

宮崎里司

(早稲田大学国際学術院教授・  
早稲田大学オーストラリア研究所長)

### 「産学官連携プロジェクトを通じた大学生の地域力活性」

**\*司会：**

引き続きまして、早稲田大学国際学術院教授、早稲田大学オーストラリア研究所長、宮崎里司からコメントをさせていただきます。それでは宮崎先生、よろしくお願いいたします。

ただいまご紹介にあずかりました宮崎です。よろしくお願いいたします。私の仕事は、きょう、前にスタン先生から伺っていただきましたので、このお二人の今のお話についてのコメントをするということで、15分いただいていますので、それについてコメントと、それから今私がやっていることをあわせてご紹介をしたいと思います。

国際学術院というのは今3つの組織があって、国際教養学部とアジア太平洋研究科と、それから私のところの日本語教育研究科というところがあります。あわせて、オーストラリアの研究所というのがあります。私が個人的にオーストラリアに10年以上、メルボルンの大学で働いていたので、今、大学のプロジェクト研究所というところでオーストラリア研究所というのを立上げております。

今、スタントさんの基調講演とか招待講演をお一人目、田辺先生と、それから吉川さんのお話を伺って、私が今大学院日本語教育研究科でやっているもののキーワードの一つが、産学官連携ということで、シンガポールとオーストラリアも似ているところがあるかなと思って、そのところからコメントをしたいと思います。

今、先生のお話を伺って、やはり意義のある、また試るべきプロジェクトについては、政府主導で遂行しているようなお話があって、それは例えば自動審査とか自動承認とか、いろんなことですが、なぜ日本はスマートシティを目指している、またスマートガバメントを目指しているにもかかわらず、それが非常に時間がかかるのかということです。今の文部科学大臣が大学の認定の3つを外したときに、あれも自動審査、自動承認であれば別に彼女のコメントは必要ないわけで、そのようなことがなぜすぐに迅速に行われないのかという印象を受けました。

つまり、今の産学官連携をやっていて私も非常に隔靴搔痒というか、いらいらするところは、例えばシンガポールとかオーストラリアもそうですが、すべきことは予算が一番ある機関、つまり産学官の官が率先垂範をすることだと。日本の場合には企業がどうしても先行しがちで、官、それから我々の大学もなかなか率先垂範ができず、遂行が遅れていることがあるかなというふうに思っています。

二人目の吉川さんも今初めてきょうお目にかかっているようなお話を伺って、夢が叶うかどうかよりも、あるかどうかがまず問題かなと。つまり、夢を持たない、または、ないということが非常に学生のいわゆるキャリア教育の中でも非常に問題。君は何をしたいんだということの前に、何がしたいのか、またはしたくないのか、そういうことを持っていないとなかなか私たちとしても、大学を卒業する前の出口保証が非

常に難しいかなというふうに思っていて、吉川さんはミリオンダラーズベイビーの中のNothing to loseという話がありました。そのようなところから今のお話、15分というのは、きょうの中でも皆さん非常に十分にお伝えできなくて、スタント先生を初め、非常に残念だと思いますが、もう少し個人的にもいろんなお話を伺いたかったかなと思っています。この話を受けて、私も問題提起をあと10分弱でして、それを皆さん、きょうのモチベーションというキーワードに絡めてお話をしたいと思います。

私が実は今やっているのは、東京都墨田区と産学官連携をしています。墨田区って皆さんご存知ですか。東京スカイツリーがある所です。そこで東京都墨田区は東京23区の中で唯一、大学と短期大学がない区です。その区で早稲田が今いろいろな試みをしています、その中の1つが私の大学院生をある教育機関に送って、その教育機関で市民リテラシーというような醸成を図る実践教育をしています。その墨田区にあるものの前に、皆さんこんな言葉を聞いたことがありますか？ NIMBYという、これは社会学の言葉だと聞いています。Not In My Back Yard。それは、世の中には必要不可欠なものがたくさんあります。ないと困るものがあります。でも、自分の裏庭に来てもらうと困る、または近くにあると非常に困るというもの、それが原発であり、清掃工場であり、最近は大学もそうだという話です。大学だと非常に学生がごみを出すし、騒音は出すということがありますが、このNIMBYと呼ばれているものの一つにこういうものがあります。刑務所、それから墨田区でやってる夜間中学というものがあります。ところが、NIMBYと呼ばれているものはこれから私も外国人をたくさん扱っていますので、移民社会は避けて通ることができない。アメリカもそうですし、オーストラリアもそうですが、シンガポールもそうですが、多民族社会、多民族国家と呼ばれているところ。さまざまな刑務所があり、そこで刑に服している人がその国の言葉がなかなかマスターできないので非常に苦しんでいると。日本ではF級の受刑者というものがあって、それは外国人のための、今は非常に日本の刑務所は過剰人員です。1.3倍ぐらいですから、独房には2人入っているという状況があるらしいです。

その他にも夜間中学というものがあります。これがモチベーションを高めて教育を考えるリソースで、いわゆるインスパイヤーされるという、これが墨田区に1つあります。夜間中学、皆さん夜間中学って見たことありますか？ 定時制はありますし、夜間大学もありますが、定時制とか夜間大学とは違って、夜間中学は日本に35しかないんですが、そこには病気とかさまざまな事情で中学校が卒業できなかった人、いわゆる義務教育課程の未就学。そこで勉強している人は非常にインスパイヤーというか、モチベーションが非常に高く、それが終わった後、大学に行きたいとかいう人もいますが、とにかく自分が何かの都合で勉強ができなかった。それをただ単に取り戻したい。自分の学習権を取り戻したいという、その思いがあって来る方です。

映画『こんばんは』というものがありますから、またいつかごらんいただければと思いますが、これはいろんな所で自主上映をされているものです。私が関わった最高齢の中学生はギネスブックに載っています。91歳でした。91歳の中学生、その方はもう残念ながらお亡くなりになったのですが、こういう方に対して教育の支援をすることで自分の教育観を高めていくというものです。

ここに最近さまざまな外国人の人たちが来ます。タイとか、フィリピンとか、中国からの帰国者もいますが、その人たちがいわゆるニューカマーと呼ばれている人たち、そんなような人たちが、東京都には8つの夜間中学がありますが、こういったところで勉強していて、私が今入っているのは一番下の墨田区の文化中学というところです。当然、夜間中学なので夜しか開いていませんが、このようなものをして3年間で卒業すると。そこで私たちの大学院生が夜間中学に入って日本語の指導をして、その人たちが夜の中に出て、きちっと役割参加ができるようにということと、もう一つは後でお話しする刑務所もありま

すが、いろいろな生活支援とか、継続学習とか、生活指導とか、そんなようなことをさせています。日本弁護士会も非常にこれは問題だと。日本のように文盲率が非常に低くて、義務教育課程が終わっている人がほとんどだということでも、今、全国で100万人の夜間中学に通いたい、または未就学者がいるという現実があります。

この現実について皆さんどう思うのか。これから2055年に向けて、アメリカとかオーストラリアとか、アジアのさまざまな国と同じように日本の人口は減っていくことも予想されますが、労働人口がどんどん減って行って、勉強する、また夜間中学に入る未就金者も増えていくと。そこには難民対策も問題になってくるということがあると思います。

最後に、あと5分ぐらい。久里浜少年院というところにも私が以前入っていた、これのいわゆる、それによって私がインスパイヤーされたという、先ほどお二人のものにも関連があるかと思いますが、久里浜少年院は少年なので20歳以下の刑に服している日本人とか外国人がいますが、ここに全国でも非常に珍しい外国人、これはモロハシさんという方からお借りしたのですが、外国人の少年がいます。いわゆる少年院です。これは特別少年院、特少と呼ばれているところで、現在の久里浜少年院はこんな所です。

久里浜少年院では、例えば群馬県の太田とか、大泉から刑に服して来ている人たち、浜松もいますが、豊田もいます、三重県の鈴鹿もいます、そういったような所で家庭裁判所から送られてきた少年たちがここで刑に服していますが、なかなか日本語ができないので私が今いろんな所で、この間までこういったようなところの法務教官と一緒にやってきたものです。G2と呼ばれている少年の収容状況はこういうもので、これから平成18年、ちょっと古いんですが、これからもどんどん増えていくということで、外国人の少年に対して日本はどのような矯正教育をしていくかということです。

まあ、送致家庭裁判所がこんなもので、非行名をごらんください。彼らたちは、女性はいませんから、女性が入る所もありますが、久里浜少年院は男だけですけれども、非行名はこういうものです。強盗、強姦、窃盗、公務執行妨害、覚醒剤、殺人、傷害、いろんなものがあります。この人たち、ブラジルから出嫁ぎで親が連れてきた子供たちは、自分の意思に関係なく連れて来られました。ところが少年院に入ると、今度は親たちが自分の子供なのに世話に困って、少年を置いて親が国に帰ってしまいます。そういったようなところで、この子供たちがどのような矯正教育を受けるか。つまり、家庭の愛がわからずに、子供たちは社会の教育に委ねられてしまうという、そういう図式があり、ここにも非常に教育の問題があるのではないかなと思っています。

15歳以下の子供もいます、20歳以下の子供もいますが、特に15歳の子供がこれから増えていくということが見られます。国はこんなようなところで、ここの子供たちを日本はどのように見ていくかという、それが非常にこれから問題になっていくということです。使用言語はこういうものです。ポルトガル語、スペイン語、中国語とありますが、ここが問題です。日常会話しかできない。片言の会話しかできない。簡単な会話しかできない人に、社会がどのようにこの人たちを受けてくれるか。だから言葉の問題は小さなようで実は非常に大きな問題だということを提案していきたいというふうに考えています。今はこのように、毎日の生活、朝早く起きてから夜寝るまで、就寝までです、こんな規則正しい生活をしています。今まで規則正しい生活がなかなかできなかったという子供たちがこんなようなことをして、日本語学習は院内生活、非行原因の除去、出院後に必要なものということで、最後には資格の取得の講習でこのようなフォークリフトの資格を取るためにやっています。

ここでスタント先生の基調講演の中にもありましたけれども、どのように私たちはこの子供たちに対して教育をしっかりとデザインをし、そのデザインをして教育をすることを通じて自分の成長につなげていく

かということがこれからの大きな課題となっていくのではないかなというふうに思ってコメントを終わらせていただきたいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

**\*司会：**

ありがとうございました。

ゲスト



橋本 英雄 (株式会社丸和運輸機関執行役員教育本部長)

## 実践報告

## 『「桃太郎文化の浸透と知徳体一体教育」で業界NO. 1を目指す』

## \*司会：

引き続き、ゲスト報告者の皆様による報告を続けさせていただきます。ご報告をいただきますのは、株式会社丸和運輸機関執行役員教育本部長、橋本英雄様です。それでは橋本様、よろしくお願いいたします。

ただいまご紹介いただきました丸和運輸機関の橋本でございます。本日は皆様にお伝えしたいキーワードは1つになります。「感働教育」ということで、この感働教育についての意味と、またその意義ということについて、私自身の生き方、働き方、また、当社の価値観、行動規範の中で何を実践しているかということの考え方の概念的な要素が非常に多いですが、この後、当社の蘇部長から実践事例の報告がありますので、私は概念、考え方を中心にお話をさせていただきます。

まず、感動教育ということ、教育と感動と、この2つの言葉の意義や重要性、必要性について私なりの考え方ということをお伝えしたいと思います。スタント先生は、「教えるよりも育てることがより重要だ」と申しています。私自身も当社の新卒予定の方に、入社する前から言っているのは「教育というのは教えてもらい、育ててもらうことではないんだよ。それを通じて、人に教えられるようになり、育てられるようになることだよ」と。例えば親であったり、先生であったり、社会、企業でいうところの先輩上司というところに、どうやってそれを恩で返していくか。つまり、教えてもらって育ててもらうためには、そのような感謝と報恩が不可欠ではないかと考えております。更に「教えて育てられるようになることがある意味一人前だ、社会人としての基本だ」ということを教えています。

また、言葉の定義もしっかりと認識をしていただくということで、入社前から教育をしております。これはウィキペディアから「教育」の言葉を調べたものですが、意味は4つあり、これを私なりの捉え方で言えば「より良く生きるために、私達は新しき社会を創造することで、世のため人のためになる社会貢献の実現を目指す。そのために、自分と相手の能力とモチベーションを引き出す。これが教育の考え方なのではないか」と。私自身はそのように考え捉え、社内・社員教育をしております。

続いて「感働」の必要性、重要性は何か。これは辞書で調べたものではなく、今回私なりの考え捉え方です。まずは、生きる、働くということの事実の中に2点あるのではないかなと思います。1つ目は、自分は簡単に変わらない、という事実。2つ目としては、人生、経営は複雑であり困難である、という事実。またもう一方では、人間が変わる要因、当社でいう「考働（考え方と動き方）」がどうやったら変わるのか。大きく2つあるような気がします。1つ目は、正しい生き方、働き方を聴いて共感・共鳴した時に、人は変化要因が起こるのではないかと。2つ目は、人（相手）の本気に出会った時に。その相手、スタント先生の教育指導は特に良い例ですが、本気度（決意と覚悟）。先ほど吉川さんからもお話がありましたけれども、やっぱりボクシングをやっている、やはり命がけ、こういった言葉でもよるのか。そのように生きている、または働いている方への感動、こういった時に私達は変化要因、つまりモチベーションというのが上がるような気がしております。

なぜ感動の動を働くという字を書くのか、ということに説明を少しさせていただきますが、私達は生きる上で働きます。また、働いていかなければなりません。それはなぜなのかということで、私自身2つの

理由があると思っています。1つ目は、当然のことながら生活の糧を得る。お金を得て、その中でいろんなものを買って生活をしていく。当然、家族を養っていくということが一つの基本なのではないかなと思います。

ただもう一つ、生活の糧以上に大事なものが、働く中に人生の糧を得ることが最も大事なことではないかなと考えます。企業でも、家庭でも、そういった人生の糧をきちんと見つけられるような教育、得られるような教育が非常に大事なのではないかなということを痛感しています。人生の糧とは、生き甲斐であり、働き甲斐であり、やり甲斐とよく言われるような言葉になると思います。そのためには、自分が何によって感動し、その感動によって自分に、他人に、何らかの働き、動機をもたらすものでなければならない。だから動くだけでは駄目で、自分に対して、人に対して、働きかけをする。そのような動機づけということが必要なんだと。そのためには「感動」しながらも、自分、人（相手）を動かすこと。人・組織・社会を正しい方に、良い方に動かす。心で、気持ちで動かすということ、また思いを共有しながら動かすことが一番大事なのではないかなと、このように感じています。

また、私が思うことは、この感動教育の教育法が何なのか。教えるのではなくて、伝えていく、語り伝えていくこと。教えるのと伝えるというのは私は大きく違うと思っています。辞書で引くとどうなのか解りませんが、私は違うと思います。教える人は頭で理解した人なのだと。伝える人は感動で理解した、心で理解した人なのだと。教えなくてはいけないから教えるのではなく、感動したからこそ伝えたい、だから情熱、パッション、そういった力、動機が高まって、人（相手）に何らかの形のプラスの影響を及ぼしていくのではないかと考えております。これは人間にしか出来ない、最も貴重な行動の一つではないかと。だからこそ人間として貴重な財産、感動教育をもっともっとしっかりと実施していく必要があるのではないかなと思います。

当社は、この教える育てる、特に育てるに重点を置いて教育をしております。スタント先生から先程お話がありましたが、当社ではそれを知解、体解という言葉を使っております。簡単に言えば、知解は頭で解く、そして体解は体で解くという意味であります。私達教える人は、先ほども言った通り知解。本を読んだり人の話だけ聞いて実践をしていない人。実践を持って感動で理解した人は、体解。また、それを聴いて実践をした方、そういった方はやはり伝えるということが出来るのではないかと。極論ですが、私は伝えられない人は教育者にふさわしくないと考えています。特に教えるだけと言ったことはIT、ICTが流行する中で、そういう教育は今後なくなっていくんだと。また、極力無くなるべきだと、特に実践する現場（社会）、その中での人財育成・開発の視点で考えれば、企業経営をする立場の一員である私自身、強く感じております。

当社は丸和運輸機関グループという会社で、小売物流を強みに3PL（サードパーティ・ロジスティックス）事業という仕事をしております。具体的には、国内外からの調達から物流センター内での入庫、保管、流通加工、そういった中に情報システム等々を含めて加味しながらも、最終的にはお荷物を店舗様、最終的には各小売様のネットスーパー又は生協様のお仕事をしていますので宅配までを仕事としておる会社でございます。丸和グループでの売上は500億円、全産業の物流費平均を5%換算と考えれば、小売業や製造業で言えば5,000億円位の企業規模と理解していただければよろしいのではないかなと思います。

そういった中で、全国で115拠点、従業員数がパートさん含み（8時間換算）8,200名の従業員が働いています。登録でいったら1万人を超す従業員がいます。その中で私は教育の責任者をさせていただいております。こういった講演も年に数回させていただいておりますが、正直言って苦手なもので、お聞き苦しい点もあるかと思いますがご容赦下さい。

私は埼玉県の春日部市に生まれまして、12人家族の中で、7人兄弟の私は末っ子です。父親が生まれた時からおりませんので、母親が重労働をして私の家族、または父親方の両親を養ってくれました。私は生まれつき右足が悪いんです。生まれた時からで、今も右と左、右足が15センチぐらい短いので、義足を履いております。小さい時は暑い夏の運動会でも長靴を履いて運動会に出なくてはならず、学校も毎日長靴を履かないといけない。

当時は黒い長靴しかなくて、晴れてるんですけど毎日長靴を履いていると。その中で、身体的なことはいじめられたことも多々ありました。

今でもよく覚えているんですが、小学校3年の時に地元で高校ができて、友達から「お兄さん、お姉さんが地元高校に進学するけど、俺たちも地元高校だな。橋本はどうなんだ」と聞かれたことがあります。「えっ、俺もそうだよ」と答えましたが、心の中では「俺は行かないよ、行けないよ」と。私の兄弟は2番目から6番目まで中卒です。それは経済的な理由があって中卒です。ですから私は兄・姉の進路を見て、自分も中学校を出たら働かなくては行けない。兄・姉と違うのは自分の足は生まれつき悪いこと。では、どうやって中卒で働くのか、小学校低学年の時から働くことの大変さを何となく感じておりました。足が悪くて働けるのかと、心配不安は毎日尽きませんでした。兄と姉の進路選択、つまり就職は、業種・業態や地域を選ぶのではなくて、住み込みがあるかどうか重要なポイントでした。就職先の選択基準が、どこで働いて何の能力を発揮するのかではなかったのです。とにかく自分の食い扶持を減らし、母親を少しで楽させることが働く目的でした。ただもう一方では、そういった兄・姉の姿を見て、そうか、働くというのはどういうことか。どういうことを考えて働かなくては行けないのかと自分で考えるようになりました。そして働けること、就職出来ることは、有り難いことなんだなということも何となくですが感じ始めました。

そのような中で小学校の当時は、本当に学校に行く不安と将来働くという不安の2つのことから私自身も大変苦勞致しました。スタント先生から、学生もなかなか明るい未来を描けないとお話があり、私も今でこそ真逆の人間になりましたが、学生の時を考えれば、自分の将来に対して明るい人生を描けてなかったし、そういったことすら感じることもなかったなと。ただ、そういった中に、なぜ自分がいるのかということだと思うんですね。それは、今の私があるのは間違いなく母親の愛情と、そして今の会社、丸和運輸機関との出会いです。最終的には兄・姉の資金援助があって高校まで行かせていただきました。そういった中で丸和運輸機関に入社させていただいた訳ですが、現社長（創業者）ですが和佐見社長との出会い、この尊敬する2人との出会い、関係で私の人生は大きく変わりました。

私が言う、この感働教育というのは、まさしく母親と和佐見社長から直々に多くの教育を受けた結果であります。母親は重労働ということで、朝も6時台に家を出て帰宅するのはいつも20時過ぎでした。正直言って母親と会話するも最低限でありましたので、旅行に行ったり、外食だとか私の記憶にございません。

しかし、会話は少なかったものの親の働く姿ということを見て思ったんですね。何で旅行もうちは行けないのだろうか。何でうちは外食も出来ないのだろうか。何で自分は足が生まれつき悪いんだろうと。こう思った訳です。正直言って、小学校低学年までは親を恨んでいたことは間違いなく、今考えれば自分が至らないと思っていますけど、そういう気持ちでした。ただ、よくよく考えて、中学生・高校生となり働くことへの緊張感とか危機感が高まった中で、よく親も逃げずに私たち家族というか、兄弟を最後まで育てていただいたなと、そういう中の母親の生き方、働き方というのは言葉でなく、行動で教えてもらった。これは和佐見社長も同じように、言葉だけでなく、一緒に仕事をする機会がずっとあって、そ

ういう姿、言葉を含めて感働教育を一貫して受けてきたなということでもあります。

継続は力なりという言葉がございませけれども、私の自分の人生を通じて、母親と和佐見社長のそういった姿を見たとき、また、先ほどの皆さんの話を聞いて改めて思ったのは「絶望は力なり」と。同じことをやっても本当に力になるのか。そういったものも当然ございませますが、ただ私の幼少時の人生を振り返ると、絶望は力なり、となります。やはり、人間は一番底というんですかね、人生における株価と同じで、一番底ってあると思うんですね。吉川さんも先ほど聞いたら大変な思いをされて、そういった時に一番底があればあるほど、その部分は強みになって、反転することが前提ではないかと、それは強みになると。だから、-100を自分が経験すれば+100というの実現可能だと思うのです。反転するのだから逆に+100も-100になる恐れはがあると、今が良いからとうかうかしてられないと。そのように株価と同じで反転するということを考えれば、自分の人生のいかなる時でも、今がマイナスであっても、これは将来生きるんだ。このようなことを小さい時の経験から、また人生の2人の恩師から貴重なことを学んだ訳であります。

ただ、それは2人の恩師が私に対しての愛情と自分に対する正しい生き方、働き方となる行動実践、この両面があったからこそではないでしょうか。そのようなことがあったからこそ、私は社内の中でよく言うのですが「三つの場をあえて経験しろ。一つは修羅場、二つ目は土壇場、三つ目は正念場。この三つをいかに経験するかが大事。もっと自分に負荷をかけろ。もっともっと負荷をかければ自分が成長するし、人様にお役に立つし、特に今の家族、今後作っていく家庭に対して貢献できる」と。自分の人生の中で実感したり、お世話になった方の事例も出しながら、そういったことを常に伝える中で、人間にも味が出てくるのではないと思うのです。味がある人間は、間違いなくそのような経験を沢山しているのではないのでしょうか。

私はスタント先生と6月にお会いし、衝撃を受けました。先生の一人一人の学生に対する教育、教育改革に対する情熱、そして一途さ。もっと言うなら、そういうものを超えて命がけで取り組む姿勢に心を打たれました。そして、何よりも先生の温かさ、または優しさ、人間愛を強く感じる事が出来ました。たかだか半日でしたけれど、食事をしながらの会話と授業の聴講で衝撃を受け、たぶん今後も忘れない記憶となりました。この気持ちは先ほど述べた母親、和佐見社長と同じような、そんな気持ちでその半日の経験は今後私にとっての財産になると感じております。

ただ、先生のことは事前に2冊の本とインターネットで情報収集して会った訳ですが、非常なる修羅場、正念場、土壇場、こういった中で生き抜いてきたからこそ、先生のそういったものが湧いてくるのではないのかなと。むしろ、先生のそういったご経験、生きてきた自信が貴重なことだと再認識致しました。私自身も教育の責任者として、そのようなことをしっかりと伝えていきたいと、このように改めて感じました。

感働教育の必要性・重要性について、やはり家庭家族では母親から、社会・企業を通じては和佐見社長から、また学校教育ということでスタント先生との出会いによって改めて強く感じた訳です。当社は、家庭や学校で教育しないことをしっかりと企業として、社会的使命と責任を果たしていこうとの考えが、教育の根本にあります。これは国を強く良くしよう、企業を強く良くするだけでなく、お客様の企業、そしてお客様の業界、当業界、そしてそういったものを通じて国家を強く良くしていこうをいった考えを強く持っている会社です。ただ、そういった中に、人づくりを通じて、良き家庭づくりが基本だと。当社はお客様第一義ということで、お客様を通じて利用者、利用者様を通じて社会に、もう一方では企業として従業員、私ども同志と言っているんですが、同志を通じて家庭に帰って、やはり人間力を高めて、家庭もよ

り良くすると。この両面から社会を良くしようと考えております。ただ、学校はどうなんだと、正直言うと、個人的には不満を持っておりました。不満というか、不安といった方がいいですかね、持っておりました。

ただ、スタント先生の家庭を良くする、そして学校から会社、また会社を通じて社会を良くするといった感動教育は感動一貫教育でないといけないのではないかと。スタント先生と出会いで自信になったのは、まずは企業と学校が連携強化を図っていければ、もっともっと良き人づくりが出来ると実感致しました。

当社の教育の特徴は「知・徳・体の一体教育」でございます。言うまでもありませんが、知は知識とか技術ということになり、体育とは体格・体力は勿論、体質を変えるための実行実践であります。何故なら社会人になりますと学生の皆さんご存知の通り結果を出さなければなりません。結果を出すには行動、実践ですね。最後に徳育で、社会を良くする、そのためには世のため人のためにお役に立ちながら、その結果として企業利益や個人収入を得るという人間としての当たり前の考え方を身に付けることです。更に言えば、人間力を磨き高めることで人間学人物学を修得することになります。

知育は社内大学・社内大学院があり、実は社外講師として早稲田大学及び東工大の先生方にも大変お世話になっております。ただ、この徳育というところの中で、これは私自身の考え方を会社の中で伝えていくのですが、よく心技体という言葉があります。私ども今知・徳・体と言いましたけれども、順番的には徳、知、体と、ピラミッドの土台、下からしっかりと積み上げていく中では、徳を磨くのはやっぱり感動。感じて働く、感じて自分と相手に働きかけて、考えて働くことを考え抜いて行動していくことが大切です。

(事務局との設定時間の違いから途中、講義修了)

これで終了とさせていただきます。本日はどうもありがとうございました。

**\*司会：**

ありがとうございました。

## スタント・メソッド「21日ルール」の実践報告

\*司会：

引き続きまして、同じく株式会社丸和運輸機関、経営企画本部長、蘇霞様からご報告をいただきます。それでは、蘇様、よろしくお願いいたします。

皆さん、こんにちは。ご紹介いただいた蘇霞と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

きょうのテーマは、「スタント・メソッド21日ルールの実践報告」です。私は2012年4月、早稲田大学院を卒業して丸和運輸機関に入社しました。大学院に在学中、スタント先生の2冊の本を読ませていただいて、スタント先生の大学教育における情熱と本気度にとっても感動しました。2011年4月から1年間、私は先生のティーチングアシスタントとして、先生の教育理念や教育方法について理解を深めました。IME (Motivation in Education 教育におけるモチベーション) という授業中で、スタント先生は実体験を交えながら授業を進め、本気で学生とぶつかり、学生と先生、そして学生同士で白熱した弁論が行われました。

2011年から新しく取り入れたことは、授業の後の感想文以外に、週に1度400字のエッセイを提出させることにしました。そうすると、1つの学期に、感想文とエッセイをあわせて21篇以上書かせることになりました。その目的は、学生と一対一のコミュニケーションをとると同時、「21日ルール」で、学生の思考力や文章力を高めることです。

「21日ルール」はスタント・メソッドの一つですが、それは新しい習慣を身につけるため、21日または21回繰り返してやることです。IME授業の回数を重ねていくと、学生は授業に対する取り組む姿勢や、参画する意欲などが著しく変化します。実際学生のエッセイを読むと、文章の表現や考えの深さ広さが変わりつつあります。

国際教養部の阿部さん、さきスタント先生からも少し紹介しましたが、彼には素晴らしいスタント効果が表われました。阿部さんは大学に入ってからいろいろな授業を受けてみましたが、勉強に熱心に取り組まない周りの雰囲気自分の熱意も冷めてって「引きこもり」状態になっていました。スタント先生の授業を受け、先生が本気で人と接する姿勢、教育への熱い思いに感動しました。

学校をやめたい阿部さんが一気に英国名門大学に留学することができました。毎週のエッセイを書くために、阿部さんは図書館で哲学の本、西洋の本、東洋の本等を調べ、生きる意味などについて自分の意見をまとめました。阿部さんのGPA成績はロンドン大学へ留学するための成績には遠く及ばなかったが、しかし、自分の成長をはっきり見せるため、スタント先生へ提出した全てのエッセイをそのまま留学申込書に貼り付けました。すると、選考が無事に合格、英国名門大学に留学する夢が叶いました。

阿部さんの成果を見て、私自身も「21日ルール」を実践してみました。2011年末頃、集中して21篇の漢詩やエッセイを創作しました。「128行詩」はスタント先生の波乱万丈の人生を漢詩にした作品でございます。先生のお蔭で、私は文章力に自信がつき、より多くの方に発信できるようになりました。

丸和運輸機関に入社してから、「桃太郎文化習得合宿研修会」等を通じて学んだ企業文化を15回にわたってエッセイにまとめました。これは「21日ルール」の継続効果であると言えるだろう。これは合宿研修会の風景です。研修会では、どう自分の思いを相手に伝え、相手の心を動かすか、その必死さと本気度が最も肝心です。

社内に「21日ルール」を広げる例がございます。部門朝礼の時、私は「21日ルール」を紹介しました。すると伊藤弘信さんがとても興味を示してくれました。伊藤さんは英語を上達させたいと思っていますが、何回も挫折したと話してくれました。伊藤さんに英語で21篇のエッセイを書いてもらうことにしました。2012年8月28日にスタートした「21篇のエッセイ」プロジェクトは、今までは11篇完成しました。伊藤さんは途中やめかけた時期もありましたが、私から積極的に声をかけることで、楽しくやり続けています。伊藤さんからメッセージが届きました。

「立派だけどできない目標掲げるよりも、小さいけどできることを確実に実行しよう！」

スタント先生の人生論と桃太郎文化には、たくさん共通点がございます。例えば、寛容、恩返し、Nothing is impossible. Never give up. 人間力を磨く、本気度などは桃太郎文化の中にも似ている言葉がございます。例えば、何事もやればできる精神、親切を尽くせ。

私は現在経営管理部で仕事をしています。会社のアジア戦略、特に中国進出をどう成功させるか、私のミッションでございます。しかし、価値観が違う国に、どう人を育成し、マネジメントをしていくか、感動教育、つまり、感動から生まれた共感共鳴こそ、成功の鍵ではないかと思えます。

この場を借りまして、スタント先生を初め、私の成長を手伝っていただいた皆様に心から感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。(拍手)

## 「感動を受ける自分」から「人を感動させる自分へ」

## スタントメソッドに影響を受けた多くの人たちに取材して感じたこと

\*司会：

引き続きまして、国際交流機関誌グローバルコミュニティ編集長、宮崎計実様からご報告をいただきます。宮崎様、よろしくお願いいたします。

グローバルコミュニティというフリーペーパーを発行しております宮崎と申します。今日はこのような機会を頂きまして誠にありがとうございます。

入口で発行しているフリーペーパーの方も少し配布をさせて頂いたのですが、今日このような機会をいただき改めてスタント先生に最初にインタビューしたときのことを思い出そうと思い、その時の号をちょっと読み返して見ました。

スタント先生のインタビューは日本人の学生さん二人と、あとモンゴルの留学生と僕と4人で先生の研究室で行いましたが、最初は1時間の予定だったんですね。ですが、気が付いてみると結局3時間以上話していて、それでも足らずにですね、次の日は電話でまた3時間ぐらい。お互い、先生と僕がソフトバンクの電話を持っていたので大丈夫だったのですけれども、それぐらい自分のモチベーションが上がったという経験をしました。

今、自分がお話しさせて頂いたように、インタビューするだけでそんなに感動を受けたんですね。

その時、僕と一緒に話を聞いた日本人の学生さん二人、あと留学生の感想文も書いてもらったんですけど、一人の感想文ですごく印象に残っていることがありまして、彼女はお母さんとあまりいい関係じゃなく、何かしこりのようなものが残っていて、ずーっとわだかまりがあったそうです。だけど、スタント先生と話した後、お母さんと打ち解けて話ができるようになりましたというメールをもらったんですね。その時は、本当にびっくりしました。僕も同じようにインタビューをして感動したのですが、生で聞いていると言葉の裏にある気持ちが伝わってきますからね。僕も4年近く、いろんな著名人とか、何か業績を残した方とか、いろんな方にインタビューしたんですけれども、あれほどの感動を受けたというのは初めてでした。

たぶん、スタント先生は本当に学生さんのことをいつも考えているんでしょうね。先生がクラスで話す、『私は決心しました』『日本の大学の授業の中では80パーセントの学生さんは残されている』『やる気のあつた20パーセントの人しかケアされていないんですよ』という言葉に、何かショックを受けたというか、教室の中がシーンとなったというようなことを覚えています。

僕はこの『感動を受ける自分から人を感動させる自分へ』というところで、一番大事なことは『学生を諦めない決心』だと思います。

スタント先生の周りではいろんな奇跡が本当に起こっています。先ほどお話しされた蘇さんなんかも実際は、25年近く鬱病で、本当に対人恐怖症みたいになられていたんですね。一番最初にお会いしたときと今はもう全然別人のようになっています。本当に大人がこんなに変わるの、凄いことだと思います。やはりそのスタント先生の『どんな人も見捨てないという決心』ですね、これが本当に一番大きなことだと

思います。自分自身も先生のことを話すと段々と興奮してきました。

本題に入りますが、自分は国際交流を主眼としたフリーペーパーを発行しているのですが、その中でインターンシップを運営を通じて色々な学生さんと交流をしています。そこで感じたのは、日本人の学生さんと留学生、海外からの留学生の交流というのが非常に少ないということなんですね。

それはいろんな理由があると思います。育った環境があまりに違い理解しづらいことも理由の一つだと思います。日本人の学生さんは裕福に生まれて、まあ、多くの人はそんなに生活に困るようなこともなく大学に進学します。一方、海外から来ている留学生は、苦勞しながら、日本で大きな夢をもって日本で生活をしています。自分の夢を実現したいという思いで一生懸命に勉強に励んでいます。例えば、いろんな大学の図書館で熱心に勉強するのはほとんど留学生という話もよく聞きます。

ここで留学生と日本人の学生ということで引き合いに出している理由は、僕はスタント先生というのはある意味留学生の代表だと思うからです。

スタント先生自身も日本にいらっしゃった時は、インドネシアからの一私費留学生としてでした。その人が機会を得て日本人の学生さんの前で話しているということは、ある意味、海外の留学生の思いを日本人の学生さんに伝えてくれているじゃないかなと思うんです。留学生が感じている「学ぶ」事の「ありがたさ」や「大切さ」、それがスタント先生を通して、日本の学生さんに響いているということだと思うんですね。

スタント先生は、先ほどのフリーペーパーやレジュメにもありますけれども、本当に大変な思いをして日本の大学を卒業して、アメリカで教授になり、また日本に帰って来て、日本人の学生さんのために一生懸命努力されている。そういう意味で、本当に何をされてきたかというのをよくよく見てみると、感動を受けることがたくさんあります。自分もその一人です。

それから、スタントメソッドの特徴は、クラスの雰囲気はどんどん変わっていくことです。先生の授業の前半は先生の講義で、後半はそれぞれの学生さんが発表をするのですが、最初はみんな、お互いによそよそしい雰囲気はあるんですけど、先生の話聞いた後は、本当に自分に素直になって、自分のコンプレックスとか、今まで悩んできたこととか、そういったことを目の前で発表できるような雰囲気が出来ているんですね。

そして、勇気を持って発表した人たちを、周りのみんなが褒めたたえるという雰囲気がそのクラスの中にできている、これが僕は本当に奇跡だと思いますね。

クラスの中が本当に雰囲気がよくなり、2回、3回続けていくと、休憩時間でさえもみんな話すようになるんです。こういうことって普通あまりないと思うんです、大学で。

先ほど入口のところでも何人かの以前にインタビューした学生さんに久しぶりに、お会いしたんですけども、皆さん社会人になって、なお一層大学時代にスタント教授のお話を聞けたということがよかったと思っておられると思うんですね。私が伝えたいのは、その気持ちを本当に大切にしていきたいということです。

5番目のトゥルーストーリー、人の心を開き、コミュニケーションを促進するということで、私の簡単な事例があるのでご紹介させていただきたいと思います。スタントメソッドの一番大事なところは、最初に言いましたとおり、諦めない決心です。

これをするとなんか人が変わりますね。僕も実際、いろんな留学生や日本人の学生さんを就職面談することがあるのですが、時々、この人と思った時は、あなたが就職するまで必ず僕が面倒を見る、絶対にそういうふうにする時があるんですね。今までそんなこと何回もないですけど、そうやって自分で決

心すると、必ず大変な状況であってもその人に道が拓けてくるというようなことがありました。何度も繰り返しますが、決心する気持ちというのを大事にしたいなと思っています。

自分も中学校3年生と小学校3年生の子供がおり、将来は子供を大学に送る立場ですので、保護者としてもお話したいです。会場にも、保護者の立場の方々もいらっしゃるかも知れませんが、今の日本の状況で大学に子供さんを送るというのは非常に経済的に大変なんですよ。まあ、夫婦共働きで一生懸命学費を子供に送っているという人たちもいると思うので、大学としても、本当に社会に望まれる人をつくってほしいというのが、保護者の立場からの願いです。

社会人として必要な、コミュニケーション力、人の気持ちを理解できる感受性、自分を燃やして周りを巻き込んでいく意思力、この3つがスタント先生の授業の中で全部身につきますね。身につけてる学生さんを僕も何人も見ました。

最後になりますが、やはり大学というところは社会に出る前の最後の場所ですよ。そこから先は本当に社会人になってしまう。社会人になると、やはり先ほどのお話にもありましたけれども、甘えは許されません。三人に一人の人が今は就職してもすぐ辞めてしまうという状況だと思うのですが、これは何とかしないとイケないと思います。

これから、大勢の学生さんの実体験もありますので、お越しの皆さんには、できるだけ大勢の仲間や周りの先生たちに今日聞いたお話を伝えていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

**\*司会：**

ありがとうございました。

ゲスト

6

栄 琦 (Supplier Manager, Global Purchasing, Xerox Corporation)

## 7年経っても心に残る教授の生徒への想い

## - 夢への道 -

## \*司会：

プログラムを変更しまして、ご報告いただきますのはゼロックスコーポレーション、グローバル購買部、サプライマネージャーのロン・チ様です。それでは、ロン・チ様、よろしくお願いいたします。

皆さん、こんにちは。今ご紹介いただきましたロン・チです。少しでも自己紹介させていただきます。私、中国の上海の出身で、大学の時から日本へ来まして、2008年に早稲田大学の国際教養学部を卒業し、その後、アメリカの大学院に進学しました。院卒の後、アメリカの現地で就職をしまして、去年の11月に日本の調達部門に異動して、今は日本で働いております。

本日の報告会のポスターに一番大きく書いてあるのが夢です。モチベーションは私たちの夢に向かって邁進するために不可欠なものでありますが、私、自分の経験と考えを話す前に、モチベーションという言葉で私自身の理解をまず話したいと思います。最初に2つのケースを見てみたいと思います。1993年にマイクロソフトは百科事典のプロジェクトを始め、そのプロジェクトのためにさまざまな分野の専門家を雇い、また優秀な経営陣をそろえました。その10年後、2001年にまったく関係ない会社なんですけど、インターネットベースの百科事典を設立され、マイクロソフトのプロジェクトとまったく違い、記事はすべてボランティアによって書かれます。

その2つのプロジェクトを見て、どちらの方が成功するプロジェクトだと思いますか。1の方だと思う方、手を上げてみてください。2の方だと思う方は？ありがとうございます。そうですね、結果から見ますと、マイクロソフトの百科事典、エンカルタと知られていますが、2009年をもってソフトの販売を終了し、11年にアンライフの運営も終了しました。その一方、ウィキペディアの方は今現在世界中誰でも利用できる最大のフリー百科事典でございます。それはなぜですか。なぜ、毎月相当な給料を受けてる専門家よりも多くの時間と精力を百科事典に充てているのでしょうか。

簡単に言いますと、マイクロソフトの従業員たちは給料をもらい、ただ仕事をしていただけです。その一方、ボランティアたちは自分の趣味があって、他の人々に知識と情報を共有したいという意欲、それと社会に貢献する願望があるから、たくさんの項目に執筆することができました。モチベーションは自分の中にこそあるものです。さっき、ボランティアの方々の行動から、人間は自分の自體性を基礎とする熱意をもって行うタスクや仕事にこそ、長く継続的に努力を重ねることができると教えてくれました。さっきスタント先生の発表でも見せてくれたマズローの自己実現論は皆様によく知られていると思いますが、簡単に言いますと、私たちは基本的なニーズが満たされる上で、誰でも自分らしい生活をしたい、新しいことを学びたい、創造したい。それに自分自身をよりよいものに向する、さらに世界をよくする意欲を誰でも持っているとは私は信じます。それこそ、私たちのモチベーションです。

本日もこちらでスタント先生の授業の経験や、スタント先生と接することによって自分に与えた影響と自分の経験を話したいと思ったのは、先生は学生時代の私にとって大学に対するモチベーションを引き出してくれた恩師だったからです。その当時のモチベーションを保つことによって、現在の仕事に対する、

そして人生に対する心のあり様が形づくられたのです。最初にスタント先生に会ったのは2年生の時、先生のモチベーションと教育の授業を取ったときでした。先生は単なる教えることではなく、学生たちを育てようとしてくださいました。他の授業とは違い、スタント先生の授業では研究する課題とかレポートの内容などは選択する自主性を私たち学生に与えてくださいました。勉強の自主性を与えられた以上、真剣に勉強することを考えなければいけませんでした。それは簡単ではありませんが、自分が趣味を持つものを見つける機会にもなりました。それでだんだんクラスを面白いと感じ、自分のモチベーションを引き出してくれるきっかけにもなりました。

スタント先生は、すばらしい授業をしていく中で、教科書だけで伝えることができないであろう勉強に対する正しい姿勢、困難に直面する勇敢な姿、人間としてのあり方など、本来私たちが学生がもっと真剣に考えなければいけない大切なことを考えさせてくれました。

学期を通して先生個人の経験も知り、先生が経験なさった困難、そして本日の成功、または、どんな状況でも諦めない精神は、先生の成功をもたらしてくれたものであり、私はその経験談に大きな影響を受けました。私も先生のように強く、勇敢に生きていきたいと強く思っています。先生は私にとって教授だけではなく、私の心の師、そしてロールモデルでもあります。大学を卒業した後でもスタント先生と連絡をとり続けています。

先生が話を聞かせてくださる度に、その思い出が新たになります。先生から学んだこと、3つ簡単にまとめさせていただきました。まず、人生には無駄なことはない、自分の努力を信じましょう。それはよく言われますが、私自らの経験を振り返ってみるとそのとおりだと思います。学生たちはよく何をしたいのかわからないからやる気が出ないと言いますが、若い時に何をしたいのか明白に把握できないのはよくあることだと思います。夢というのは、生まれつき持っているわけではないからです。いろんな勉学や経験によって、自ら見つけるものです。最終的に夢がまだ明確にわからなくても、今取り組んでいることで小さな目標を設定し、それに努力を向ければ良いと思います。それによって得た経験と知識は最終的に大きな夢につながります。

例えば学校で勉強する、文学や数学の理解をすることを通じて、社会人としてジャーナリストや会計士になるという選択肢が生まれるのです。それに、入社する際、誰も平の社員からスタートします。そこで基本の仕事や組織上のオペレーションを理解することによって、管理職に昇進する際、よりよいマネージャーになれるのです。

努力というのはいつどこかで報われるのかわかりませんが、いつかどこかでそれは報われます。努力が報われる唯一の方法は、努力を継続することしかあり得ないです。それは大学の時、スタント先生が教えてくれたことです。私はつらい時があると、その言葉を思い出します。

その2、困難を恐れなくて、むしろ歓迎しましょう。困難は実に人生の大切な贈物です。それは私の前に発表した方々も同じようなことを言っていました。私の自分の経験から言いますと、大学卒業と大学院に入学する間、実は1年間のブランクがありました。経済上の理由で進学がすぐできなかったのですが、その1年間、私は日本で塾講師として働きました。その時、私はスタント先生に教わった目標が明確になるとモチベーションが上がるという考えに基づいて、授業前後の何気ない会話の中でも、意識をして生徒たちに目標などについて話をさせ、考える機会を持たせました。今でもその当時の生徒たちとやりとりを続けていますが、何年たっても記憶に残るほど影響を与えることができたのも、やる気を科学的に分析したスタントメソッドの効果だと思います。

その当時は私にとって次の年はどうなるのかまったくわからなく、それが人生の中で一番困難な時期だ

と思っていましたが、今振り返ってみますと、塾講師の経験は本当によかったと思います。この経験があったからこそ、今の自分がいるとようやくわかりました。その1年間の経験があって、教育を受けられる機会の大切さを痛感し、最悪の時、より頑張れるようになりました。この経験から、経済的な安定が大事だと痛感していたため、大学院を卒業するかなり前から積極的に就活を初め、今の仕事を決めました。また、最も重要なのは、その経験によって教えることが好きな自分を発見できました。今は必要な実務経験を蓄積した上で、いつか教育に専念しようと心に決めています。順境も逆境も大切な経験ですので、努力を続ければ、自分の夢につながります。

その3、自分の夢を探し続け、追い続けましょう。私たちはそれぞれ自分の夢を持っています。それに、人生によって、人生の段階によって違う目標を持っていますが、短期的な目標や長期的な夢は人生で同じ役割を持っています。それは日々の努力を支えてくれることです。本当に好きなことを見つける、素晴らしいと信じる仕事をするには、自分のモチベーションを引き出す日々の努力を続けられ、より大きな目標を達成するために避けて通れない道です。スタント先生は工学、医学、薬学の成功に止まらず、教育学の博士号を取得し、今、スタントメソッドの教育法を確立しました。それは先生が自分の夢を探し続け、努力し続けた成果です。私も今の会社で働き始めて2年たちますが、他の会社の人々に出会い、コミュニケーションを通じて、いろんな企業文化、さまざまな業務スタイルを見ながら、組織行動論や人材教育に学びたいと思っています。その夢は何年も何十年もかかるかもしれませんが、私は諦めません。

最後に言いたいのは、自分の努力を信じてください。それは必ず自分のためになる経験をもたらしてくれます。すべての経験を大切に、自分の夢を見つけてください。どんな状況があっても夢を忘れず、それによってモチベーションを保つことができます。内発的な動機づけによって継続的に努力することができます。努力によって、自分が進んでいきたい道を自ら見つけ出し、一歩ずつ歩みを進めていきましょう。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

**\*司会：**

ありがとうございました。

## 〔コメンテータ〕

樋口 清 秀

(早稲田大学国際学術院教授・  
早稲田大学ヒューマンリソース研究所長)

### \*司会：

引き続きまして、早稲田大学国際学術院教授、早稲田大学ヒューマンリソース研究所長、樋口清秀からコメントをさせていただきます。それでは樋口先生、よろしくお願いいたします。

ただいま紹介にあずかりました樋口でございます。

私は普段から、スタント教授が研究されている「学生にいかにもチベーションをもたせるか」あるいはその実践については共感を覚えるものでありまして、私の講義や演習指導にもとりいれております。

直近で手に入れた本に、イアン・エアーズ著の、『やる気の科学』という本があります。これは文藝春秋から翻訳され、出版されています。『やる気の科学』というとモチベーションかなと思うのですが、原著名はCarrots and Sticksという、人参とスティック（棒）、すなわちアメとムチとなっています。アメとムチを使えば人はよく働くのではないかと、何か人をロバと見立て、働かせるようなところをいまだに、原題にもってきてやる気を起こさせろというのめいかなものかなと思いますが、中を読んでみますと非常に単純な話が展開されています。労働者を良く働かせる、また良く働くためには、適切なインセンティブを労働者自らに見つけさせなさいと言っています。インセンティブ、何をしようとするか。そして、その意思・目的を達成するために、アメとムチの両方を使い分けなさい。もしうまくいったらば、自分を褒めるために温泉に行こうか、世界旅行に行こうかと。だめならば、罰則として、たとえば、今日は夕食抜くことにしようかという話です。これで本当にモチベーションを高めて維持できるのかとことについては、私はいささか疑問をもっております。

このイアン・エアーズさん、イェール大学の教授ですが、自分のモチベーションを維持する、ないしは実現をする、あるいは自分のある目標を自己実現するために、私は何をするかというとコミットメント、すなわち、あらかじめ「私は何々をします」と宣言しておく。やらない場合には人からお前はうそつきだと言われかもしれない。うそつきにはなりたくないの、目標を実現するべく一生懸命努力するであろう。このコミットメントこそ重要だと強調しています。ですから、モチベーションを維持するために、絶えずコミットメント活用する。私は将来総理大臣になると、こう言い続けるか、それとも私はいずれノーベル賞を取るとかを言い続ける。そうすると、モチベーションが維持できると言っています。そして、うまくいけば自分を褒め、うまくいかない場合は罰を自分に与えることによって、さらに自分を引き続き自己努力する人間に高めていくことができると言っています。

しかし、これには私はどうも首を傾げざるを得ない。アメとムチで人はうまく行動していくのか。自分はそれで本当にうまく自己管理できるのか。私自身の体験で考えてみても、こんなアメとムチではうまくいかないのではないかと思います。

本年8月、大学の交換研究制度を利用してオックスフォード大学ハートフォードカレッジに大学に研究滞在しました。オックスフォードの教育内容につきましては同カレッジの教授から多くを聴取しました

が、オックスフォードでは各教員に向けに面白い本を作り、販売していることを聞きました。『オックスフォードマニュアル』という本で、オックスフォード大学における教本です。どうやって学生を教えるかということについて、まさにこの motivation and confidence という、やる気と自信があれば間違いなくオックスフォード大学の教壇に立てますよと強調しています。教壇に立つ以上は、これをもって教えなさいと。まさにモチベーション重要さです。生徒に何を教えようと認識すべきである。またそれに加え、各教員は「自分はできる」と自信を持つということです。

じゃあ、これを学生にどうやって仕掛けるかというのは大きな問題だと思いますが、これこそ教師の重要な役目であろうと思います。それには、まず学生には社会観察をさせるべきと考えます。自分の存在位置というものを確実にわからせなければならぬ。これは世界なら世界、自己の周辺なら周辺でも構いませんが、自己の立つ位置を自己認識持たせなければならぬ。すなわち、何が問題なのかまた何に取り組むべきかを自己認識させるべきと考えます。これがわからないとモチベーションどころか、何もできません。私は、今までもう20年を超える大学教員の生活を送ってきていますが、問題意識のない学生はいくら教えてもほとんど伸びていかないことはしばしば経験してきています。

ですから、まず本を読ませる。周辺の情報に触れさせる。ないしは周囲の友達、ないしは我々教員と交わせる。教員とのディスカッションもあるし、場合によってはアルコールの席もありますが。その中で、なるべく学生を褒めることが重要であろうかと思えます。きょうの新聞に出ていますけれども、褒めると成功率が高くなるということがと実験の結果から証明されているとのこと。まず、褒めましょう。スティック（棒）あるいはムチは要りません。常に人参だけ使えばよろしいということになります。同感です。しかし、どのようにそれを使っていくかが問題なのではないかと思えます。

それが次の問題になります。我々は大学において知識はいくらでも教えられますけれども、この知識というのは有限です。量は多いですけど、たかが知れている。しかし、知識の後から出てくる各個人における知恵というのはどれほどかわかりません、ほとんど無限だろうと思えます。ですから、我々大学の教員は、教室の場において、どのような形にせよ学生に知識は与えることはできます。一方、われわれは友達との会話の中からも知識は与えられることはしばしば体験します。しかし、知恵は自己で形成されていくものであろうと思えます。これは無限に展開する。これは自己発現といわれるものであろうかと思えます。これこそ学生の行動発起に必要なものでしょう。

ですから、我々教員は学生に知識を与え、学生は知恵を自己形成する。これがうまくいけば、敢えて「モチベーションを持つ」とは言わなくても、この知恵を持って学生は自信をもって社会に出ていくだろう、ないしは社会で働いていくだろうと考えますが、しかし実はその学生の精神のなかにモチベーションが形成されているに違いないのです。私はよく学生にドラえもんを教えます。「未来は自分で変えられるよ」です。将来は自己の努力で決められる、したがって自分は自分の将来を自己の努力で切り開いていく楽しみを享受できますということです。これはまさに私にも当てはまります。私は、もし兄が存命であったならば、とても大学の教員になるどころではありませんでした。兄が建築士だったものから、早稲田を出たら兄設立の会社の経理をやれという話でして、確かに兄の言うとおりで、その仕事をやっていたはず。間違いありません。兄の命令絶対でしたから。これは一種の外からのモチベーションになります。非常に運悪く、飛行機事故なおかつ新婚旅行中に亡くなったことにより、私は別方向の道を歩まざるを得なくなりました。もう実家へも帰らず、自分の能力で勝負しなければならなくなりました。それが今日の職にありつくことにつながりました。故に兄が違った形でモチベーションを与え、学者にならせてくれたと言っても過言ではないだろうと思えます。

さらに私ごとで申し訳ありませんが、私は大学教員ほぼ20年の経験を持ちます。半分が早稲田、半分が他大学ですけれども、まったくの自慢ではありますが、私のゼミの学生で卒業する場合、大学院生を含めて、職が得られなかった学生は誰一人としていません。自分が好んでしないという学生は2人ぐらいいましたけれど、職に就きたくて就けなかった学生で就職できなかった学生は今までいません。何をやってきたか。学生には、「人のやっていないことをやりなさい」とモチベーションのきっかけを与えます。これは経済学でいうところの、製品の差別化論につながります。同じものを作って、隣り合った店同士で同じ物売りましても客は分散するだけで相互利益にはつながらない。ですから、現在では自ら安定的な収益確保のための戦略展開として、ルイ・ヴィトンあり、コーチその他のバック生産・販売があるように製品の差別化政策が徹底されているわけですし、当然労働力においてもこの製品の差別化が重要であります。相互に同じことをやることは意味ないよと教えます。

さらに、学生に言うのは、人と同じことをやるから悩むのだと。これは北島康介選手が言ったように、平泳ぎで世界記録を取るためには人と違うことをやったので記録が出たわけで、他人と同じことをやろうとするとうまくいかないことがしばしばで、そこで「私はできない」と悩むことになります。だから大学の勉強でも、まず人が行っていることに対して、まず自分が理解できないことは、その人がその理解できないことをすでにやってるわけですから、もうそこは手をつけなくても結構だ。教えられ、皆が理解していることを懸命に理解しようとする、これは高校までは重要ですが、大学以降は自分の人生ですから、わからないことを一生懸命理解するのにエネルギーを使って、自分はどうも二番手、三番手にならざるを得ないと考えるなら、まずはそういうことにエネルギーを使うことはやめる。次に、理解したら、それについて何が解決されて、何が解決されてないかということを知りさせる。それを討論の中で行います。そこで三番目が重要でして、では自分は何をするかを認識・確認させる。これはとくに卒業論文ないし修士論文作成に着手させる場合に有効ですが、これによって身に付けた「自分は他人が行ってないことをやっている」という自信はすべての面で有効に作用します。面接には絶対です。これがスタント教授のモチベーション論を応用した私の実践例です。ただし、ここで自己意識と自己自信の確立というのが出てきますので、まさにオックスフォードで言われているモチベーション&コンフィデンスともかかわっています。これはかなり成功していると自負しています。

さらに、これは皆さんの周辺で、もしこれから就職を探そうとしている人がご身内・知り合いにいたら必ず言ってほしいのは、「希望先を第一志望、第二志望とやらないで、第一志望を三つ作りなさい」と。そうすると、いずれかの第一志望が落ちてでも、次の第一志望を狙えばいい。モチベーションは下がりにません。これを第一、第二、第三志望とやるから、第一志望を失敗すると大変傷き、モチベーションを下げてしまいます。これは学生に対する進路指導の重要な戦略になろうかと思えます。

もし学生が「先生、自信がありません」言うならば、みんな大学院を目指すように仕向けます。私のところはゼミに入るとき必ず何をしたい、卒業後何をしたいと聞くのですが、特にありませんという学生にはいろいろな研究問題を提示して、面白いかつ自分の出来そうな研究を学部ゼミで行わせ、ある程度できるとの自信を持たせて、大学院に行かせます。学生は東京大学行ったり、早稲田の大学院に行ったりしていますが、大学院というのは学部の入学と異なり、研究計画、研究能力が主に問われますので、しっかり研究姿勢を身につけてれば、容易に進学可能です。みんな自信をもった生活をしています。

以上のように、我々教員の立場というのは学生に対してどうするかということをやはり明確にしなければいけないだろうと考えます。ところが、モチベーション形成以前に重要な問題をわれわれは抱えています。学生指導において、とくに論文作成指導において、論文の書き方、文章の書き方自体わかっていない

学生が非常に多い。論文の論理一貫性あるいは文章構成、段落の取り方それさえも身につけていない学生を多く見かけます。我々それから教えなければいけない。これは英語ができようができまいが同じでありまして、これは我々20年前の学生と全然今は違います。以前は学生自身が論文作成時には論文の書き方を身につけて教授から研究テーマについて指導を受けてモノです。それが最近、好き勝手に書いてしまう。で、私は「こう思います」というのを平気で使います。これは私の研究室では絶対受け入れられない話でして、「勝手に思っていないさい」で切ります。論文作成あるいは他人を論ず場合には基本は十分理解させ身につけさせる一方で根拠ある、あるいは矛盾のない話をさせることが重要です。

皆さんとここで一つ情報共有したのですが、「ハワイに行って親切なアメリカ人に会いました。それをもってアメリカ人は親切だといえるか」という課題、これが我々のゼミの最初の討論です。アメリカ人はすべて親切か。一方、たまたま我々がどこかに国に行って泥棒に遭った。あそこの国の人は泥棒だ。一を見て十を言うてしまうのは果たしてどうだろうか。これは日常よく見られる対話です。これは帰納法といひまして、論理学においてよく使う論法です。

その一方で、我々科学の場合には前提条件を設定し、その前環条件の共通のあるルールのもとで何を言えるかを考える。これが我々大学において重要な思考訓練ではないかと考えます。それをなかなか理解できない人がいまして、学生においてよく見られるケースですが、私は「そのように思っています」あるいは体験したから、そのように確信していると強調します。これでは学問はできません。それはよくアメリカは自由ですばらしい国だという人がいますが、これへの反論はいくらでもあります。たとえば、この間の選挙を見れば明らかです。ロムニーさんとオバマさんへの白人の投票率が65%と35%でした。これは何を意味するだろうか。それでもアメリカは平等だと本当に言えるだろうか。いまだに差別が残っているとと言えるのではなからうか。

「現実をよく見よ」と私はいつも学生に言い、そこから問題を見つけるようにさせます。良いとか悪いではなくて、問題を見つけて、それに対して自分はこういう問題を設定し、研究をしますと認識させる。そこにモチベーションとコンフィデンスが確立されます。これは学部でも十分できる話であります。

以上でコメントとさせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

## 私が考えるモチベーション「GIVE, GIVE, GIVEの精神」

### \*司会：

これより現役学生及び卒業生による報告とさせていただきます。それではよろしくお願いいたします。

皆さんこんにちは。今年の3月に早稲田大学の国際教養学部を卒業しました北村麻里子と申します。今、都立高校で先生をしていて、ちょっと今日は授業と違う雰囲気です。大変緊張しています。それと同時に、今、2カ月の子供の母でもありますので少し準備不足な部分もあるかと思うんですけれども、7分の間最後まで、ご清聴よろしくお願いいたします。

本日は「本気」と、「Give, give and give」という、先生の2つのキーワードを用いて、私が考えるモチベーションについて話させていただきたいと思います。私はスタント先生のゼミに入った当時、2つの目標がありました。1つ目は、スタント教授は教育の博士号を持った国際教養学部唯一の存在であり、私は教育に関わる仕事がしたいと思っていましたので、彼のテクニクを自分のものにしたいということでした。2つ目は、怠惰な自分を直すと書いてあります。なぜこのような目標を持ったかといいますと、スタント先生のゼミに入るためには条件がありました。必須になっている書籍を読む、エッセイを提出する、インタビューを受けるということが条件でした。しかし、私は提出期限といったものにとってもレイジーでして、これらの達成ができず、後日受けさせていただいたインタビューで厳しく指導を受けました。そこで、せっかく指導していただいたのだから、このレイジーさはゼミの中で直していこうというふうに思いました。

3年後期、ゼミ所属当初、時間に間に合うような人になりたい、約束や期限を忘れないような人になりたいと願いながらゼミに所属したんですけれども、こういった思いはスタント先生のゼミの間に思い出すという程度だったんです。で、それだとどういうことが起こったか。2011年11月、私が実際に授業後に書いたフィードバックによると、「たくさんやることがあると一つのことに集中できなくて、すべてのことが敵のように見える」というふうに書いていました。先生に、「何でこんな怠慢さは直らないんだろう」と何度も何度も聞いたところ、本気度が足りないんだよ、というふうに言われたんですね。本気度というのは何なのか？この怠慢さが直らないというのは永遠のテーマなのかというふうに私は思ったのですが、じゃあ本気の前兆として実践をしてみようと思ったんです。で、じゃあ提出期限に間に合わないのが原因だから早く取りかかってみればいいんじゃないか。下調べなどに時間をかけるようにすればいいんじゃないかと思いました。そうすると、プレゼンテーションやエッセイを提出するにあたって、早く取りかかるようにした分だけ時間の余裕ができて、その内容自体が心から面白いな、エッセイを書くこと、提出自体が目的ではなく、この内容ってすごく面白いなというふうに思うようになったんですね。これは私にとって本気ということなんだというふうに初めて気付かされました。

そして、本気で取り組める人間に私は少しずつ、簡単にはいきません、先ほどのスーさんのお話のように、21日チャレンジして、もっとチャレンジして、それでやっと本気で取り組める人間になってきたかなというふうに思っています。「本気」というのはスタントメソッドの核の部分でありまして、先ほども何人かの方がお話しされていたように、外発的モチベーション、内発的モチベーションとありますが、アメとムチの動かされ方ではなくて、自分から何か物事に興味をもってやれるように、つまり内発的に同期づ

けられるようになったというふうを考えています。

私のもとと課題に取り組んでいた理由は、提出期限に間に合わなくて悪い成績をとったりするのが恐いし、成績がとりたいからという理由でやっていた。これは説明は要らないと思いますが、外的モチベーションで、課題に取り組む理由が、そのこと自体が面白い、自分がやりたい、文章を書きたいというふうになったのが内発的モチベーションだったり、スタント教授のいう本気の部分なのかなというふうには私に考えています。

今でもスタント教授がよくおっしゃってくれるんですけども、私が4年生の時に卒論を書いているとき、「先生、シャワーを浴びてる間も卒論のことを考えちゃうぐらいすごく楽しいんです」と言ったんです。それをスタント先生は卒業後、(旧姓は萩原なのですが)、「萩原マリコさん、そういうことをいつも言ってたよね、4年の頃は」というふうに、今でもよく昔話として話してくれています。今年の1月に出したファイルナルレポートには、「I'm observed in writing thesis.」というふうに書いていて、この2011年の11月のコメントと比べると大分私は変わったかなというふうに思いました。

後半、Give, give and giveの話に移ります。その心を発見した時は、私は人間関係の悩みがありました。4年生の前期ですね。ある人とすごくうまくいなくて、何も手がつけられないくらい悩んでいたんです。これは並木さんという先輩の方のプレゼンで、「Give, give and giveという言葉はスタント先生からの教訓で私は大事にしています。」というふうにおっしゃっていて、もう涙が出るほどそのプレゼンに感動して、私に足りないのはここなんだなというふうに思って感銘を受けました。そこでスタント先生に、こうこうこうで、ある人とよくいなくてと相談したんです。そうすると先生が放課後、1時間以上話を聞いてくれました。それから、Give, give and giveというのは何かというと、「俗にいうギブアンドテイクではだめなんだよということでした。何かというと、ギブだけをしてればいいよ、そうすると自然に相手に影響して、相手も変わってくれるから、とにかくギブだけを試してみよう。」というふうに先生は言ってくれました。身近な人ほど難しいと書いてありますが、今の私、ある人というのはここでちょっとあれなんですけど、当時のボーイフレンドのことで悩んでたんです。今の旦那さんのことですごく悩んでいて、先生に、身近な人ほど難しいから21回頑張ってくださいというふうに言われて、なかなかうまくいかなかったけど続けていくうちに、その人間関係も改善されていきました。それで、自分から相手へと、視線が動くようになったんです。もう自分ばかりどうしよう、どうしようと思っていると、どうしても相手に気が回らないんです。前半にお話しさせていただいた本気なんですけれども、本気で取り組めると結構自分自身に余裕が出てきて、自分の幸せ充実感だけではなく、「余裕が出てきたから相手を幸せにしてあげたい、相手に充実感を与えたい。」というふうに思えるようになりました。これがスタント教授のゼミに所属した間に私が一番大きく変化した部分かなというふうに思っています。

私が考えたところによると、相手に何かプラスの影響を与えるには自分自身が満たされている必要があって、その自己実現をスタント先生はすごく手伝ってくれました。そこで私は先生を人生のロールモデルというふうに考えるようになりました。高校教員の仕事においては、いつもGive, give and giveの実践的テクニックを忘れずに、生徒にも、何でもこうしてくれないのよというのではなくて、自分からいっぱい与えてあげよう。そうしたら生徒は必ず伸びてくれるというふうに信じて、先生の真似をしているという部分があります。

二番目ですね、一児の母として。まだ2カ月なのでもう本当にあやしても笑ってくれるわけでもないし、常にこっちからGive, give, giveですね。3時間に1回授乳して、夜泣きもしてという毎日。その中でこのGive, give and giveの精神を学んでいて本当に良かったなというふうに私は思います。それほど子供に与え

られることがすごく自分で幸せだなと感じています。

前半にお話しした本気という姿勢と、Give, give and giveというのは実はつながっていて、本気で取り組めば自己に余裕ができて、人に与えられる人間になるということになります。私はそこに気付けたことがすごくうれしいし、数あるスタントメソッドの面白さだと感じています。スタントメソッドというのはたくさんいろんなことがあって、一つ一つ覚えるのは難しいと思う方もいるかもしれないんですけど、こうやってつながっているので実践していくうちにどんどんそれが自己実現につながっていくのではないかと考えています。

短い時間でしたが、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

ゲスト

8

廣松 大和 (早稲田大学国際教養学部2012年卒業・科目等履修生)

## 「モチベーションを科学する」学生

こんにちは。私は2008年の秋学期、9月から翌年の3月までの半年間、スタント先生の授業を受けて、その間に劇的な変化を遂げました。廣松大和と申します。このタイトルは日経ビジネスオンラインの記事にさせていただいた時にも使われたもので、本日のプレゼンテーションはその内容から大きく切り取ったところがあります。

内容は、本当にこうやって順を追って皆さんに、できるだけわかりやすく伝えたいぐらい、本当にそれぐらいものすごい変化があったわけなんですけれども、変化にもいろいろありますから、それがいいか悪いかは皆さんのお話を聞いて判断していただければと思います。それで、どういうふうになったかというところだけを見てもわかりませんから、まず話を、スタント先生の授業を取り始めた9月、その時のことから話を始めたいと思います。

皆さんにもご自身が学生の頃、生徒の頃のことを思い出してほしいんですけれども、授業というものが楽しかったでしょうか、それともつまらなかったでしょうか。授業に行きたいとか、講義に行くのがいやだな、面倒くさいかな、みたいなことを、スケジュールを見ながら思われたと思うんですけれども、こんなことをスタント先生の目の前で言うのも何なんですけれども、正直、僕にとっては授業がつまらなかったです。それがどんな理由かということ、授業に遅刻してはいけないとか、あるいは一般的に、いろんな生徒の話を知ると、スタント先生の授業って自慢話が多いよね、みたいなことだったり、周りが国際教養学部のカリキュラムが特殊なので、帰国子女が多い中、僕は純ジャパとして九州から出てきて非常にカルチャーショックを受けて、何で自分は東京にいるのにまるで海外にいるような気分なんだろう。さらに英語力がない。そういう状態で、他の生徒が英語で会話をするわけです。それがわからないし、それだけならまたいいんですけど、スタント先生の話もよくわからないんです。だから、必然的にこういうふうになっちゃうわけですね。

で、授業の外でも、その頃の僕は不満を持っていました。これまでの話にも出しましたが、何でもみんな勉強しないのかな、みたいなことを思っていました。それはもちろん学生だけの責任じゃないだろうということは思っていました。大学生だけではどうしようもないかもしれないし、いろんな社会的な構造が原因だけれども、それにしてもみんな何のために大学に来たの、何のために親御さんが働いて金出してもらってるのかな、というのをものすごく強く思っていました。ずっとそういうフラストレーションがたまっている状態ですね。

もう一回授業の中の話に戻ります。感想文を書くという話が（他の方の発表の中に）出ました。これは僕が書いた分ですね。で、その中にこういうことが最初の頃、書かれていました。初回、第二回、第三回のものを取り上げたんですけれども、ちょっと読んでいただければわかると思いますが、よく書くなあと、こんなことを先生に向かって。それで、今見てもこれはすごいなと思うようなことを書いてたわけなんですけれども、さらにそれだけではなくて、日経の記事にもありましたけれども、当時僕は、この頃半分が刈り上げというような奇抜な髪形をして、でかい態度で授業に出てたんですね。こんな感じだったんですね、当時。まずいだろう、これじゃあ先生は相手にしないというか、周りからも浮いちゃってもしようがないでしょうと思うんですけど、こういうふうな学生のことを皆さんモンスターペアレントという言葉はもち

ろん耳にされたことがあると思うんですけど、スタント先生語録というのがありまして、その中では僕みたいな生徒のことを、モンスターチューデントと、こう言われているわけです。うまい！ いや、うまいと言ってる場合じゃなくて、僕のことですからね。

そんな僕がどういうふうに変化をしたか。そのきっかけとなったのが、4週目の授業の時に行った発表でした。これは教科書のあてがわれた部分を読んで、そこに対してクラスのみんなに説明をする。自分の意見を述べるという形なんですね。ちょうどこんな形でプレゼンテーションをパワーポイントなんかを使ってやるんですけども、その出来がひどかったんですよ。僕、さっきも言ったように英語ができないし、みんなが言っていることもわからないから、本を一生懸命読んで準備するんですよ、辞書を引ながらいろいろ書いて、それで、ああいうことか、こういうことか、と。だけど、いざみんなの前に立って話をするとき、英語でしゃべりたいと思ってもしゃべれないし、終わった後に他の学生が、質問をどうぞみたいな感じになったときに言ってくれるんですけど、わからないんですよ、それも。やっぱり学生同士なので言葉遣いとか難しいですから、どうしてもできない。

で、本当に僕にとってはそのプレゼンの時間は悪夢でしかなかったんです、恐らく他の学生にとっても悪夢でしかなかったと思うんですけど。ところが、そのプレゼンテーションが終わった後に、スタント先生が僕に対してこういった言葉を投げかけてくださいました。見てください。英語がスキルでしかないという話はよくありますけれども、こういうことを公に僕に対して語りかけてくれたのはスタント先生が初めてでした。で、ちょっとうれしくなったんでしょうね。その日の授業の終わりの感想文で、僕はプレゼン中に、英語だから言えなかったけど言いたかった、そういうことを、さっきの写真のものです、あれにバツと書き込んだんですよ。で、いっぱいにして出して、いっぱい吐き出して。その次の授業の冒頭で、毎回前回分の講評をする時間があるんですけど、そこで僕の感想文を取り上げてこういうことを皆さんの前で言ってくれたんですよ、学生の前で。

で、僕の机に来て教科書をパツと取って、「みんな見ろ、廣松君はこんなに準備してたんだ。分かるか？ 廣松君はがんばってたんだよ、それは表からではわからないだろうけど」と言ってくれたときに、みんなの前で恥ずかしいんですけど、でも、同時に、自分としては、目頭が熱くなりました。今も思い出すとそんな感じがするんですけど、この行間を読んでほしいと思っています。

それから僕の胸の中がグググと変わってきて、その後僕がどうなったか。その後は講義がつまらなかったものが楽しくなって。授業の雰囲気というのは周りの生徒とのつながりです。それから英語はわからないけれども、頑張っていこうじゃないか、と。これはスタント先生の自慢話にも似た話を最初のうちは、何だこの話はと思っていたけれども、この時になって、苦労しないで誰でも自分のなりたい自分になれることはないんだなということを強く思うことができました。だから僕も、この大変な環境だけでもそれを乗り越えていかなければいけないし、そのためのすばらしい場所かもしれない、そういうふうに思いました。社会に対して不満はありましたけれども、それに対しては前向きに向き合っていないといけないし、共感できる仲間というのは少なくともここにスタント先生がいるじゃないかと、そういうふうに思えたのです。

それからもう一つありましたね、変化前の感想文。これを第5回、7回、8回、9回とありますけれども、本気で書いたのかと思われるかもしれませんが、でも、素直にそういうふうにしたし、それをスタント先生に伝えたいなというふうに思っていました。もう一つ大事なものは、当時、半分が刈り上げのヤンキーみたいな格好だった僕が、何とこの頃にはすっかり変わって、このようになっていました。(笑)

ということで、スタントメソッドによる、まさに事例にあてはまるかと思えますけれども、劇的な変化

を遂げることができたと思っています。もしかすると、例えば今の単純にストーリーを聞いて、ある生徒がちょっとつまづいているときにタイミングよく優しい言葉をかけたから変わったよね、それだけの話じゃないの、みたいに思う人がいるかもしれないですけども、でも、それは自分もわかるんですけども、やはり僕の話を通して一番伝えたいのは、モンスターチューデントに対してどれだけの先生が真摯に、辛抱強く勇気をもって指導に当たれるか、そこだと思っています。そのことをスタントメソッドではケアリングというふうな言葉で定義がされています。

僕のパターンの中では他にも感想文のこととか意識だとか出てきました。こういうことは教育に携わる方なら、もちろん先生と名のつく人でもそうですけれども、ビジネスの場においても、家族であっても、あるいはどんな形でも人と接することがあれば、たとえ人と接することがない人でも、例えば仮想現実の中でもきっと教育に関わる部分があると思うので、こういうふうな何かに対して積極的に関わっていくような、そういう姿勢に意味があるのではないかと思います。詳しくは先生の近著の中に書いてありますので、それを読んでいただければというふうに思います。

それから、実は、その話には続きがありまして、このシンポジウムに出てこうしてスピーチをするようになるまでの過程にもう一つ大切なことを学ぶことができました。それは、スタント先生の研究室に行った時のことです。廣松君、今度シンポジウムに出ないかという話をされました。それで僕は、ああ、そうなんだと思ってたんですけども、その次に先生がおっしゃったのは、廣松君、大学院に行きたいなら推薦状を書いてあげるからシンポジウムに出ないかとか、あるいはシンポジウムの後で本を出すんだけど、それに君の名前を載せるから、それがアカデミックな功績になるよ、どうだい？ とおっしゃるから、いや、アカデミックな功績、いや僕は教育学に行くわけじゃないから別にならないんじゃないかなみたいな感じでいたんですね。あとは、先生はしょっちゅう録音とかされるんですけど、僕が話をしながら、おもむろにスイッチをピッと入れるわけですよ。いや、ちょっと一言言ってくれてもいいんじゃないかと思うわけです。どうも、そういうことが気になるたちでして。

僕のストーリーというのは、今話を初めて耳にされる方も多と思いますけれども、先生が科学的な研究の一つの事例としていろんなところで取り上げていらっしゃるし、実際授業でも使ってます。それを僕は時々耳にしながら、何かちょっと気持ち悪いような感じが実際したんです。で、例えば先生のお蔭で廣松君は変わったんだよという語られ方が必ずされなくてはならないことに対してだったり、あるいは自分が研究の対象とされているということが何か腑に落ちない、そういう気持ちを持っていました。

それが先生とその話をしたときにパーッと出たんです。だけど、先生がその時にこういうことをおっしゃってくれました。僕は自分のルールが細かいものがすごくいっぱいあって。悩んで反抗期が長く続いた、若者にはよくあるかもしれないけれども、自分の周りに殻を作って、自分が傷つくのが恐くて、そういうふうなところがあるのかもしれない。それからまたスタント先生は仕事上のことで、言い方は悪いけれどもビジネスとして僕に接しているのかなみたいな疑問もあったわけです。だけど、先生はこうおっしゃいました。ここでいう大きな夢というのは、例えば最初にこういうこと（冒頭のスライドを指しながら）がありましたけど、社会に対する不満があるからそれをよくしたいという夢があるし、それがこういうふうにして向き合っていきたいというふうに思っていました。だけど、それには僕は周りの人との違いを気にしてたりとか、あるいは自分がしたことが記事になる、あるいは扱われるということに対して敏感になり過ぎていたところで、世の中に出ていって何かができるということはないんじゃないかと、そういうことをスタント先生が教えてくれました。

そして、もう一つは、そのスタント先生との話を通じて自分の将来をもう一回見つめ直して、自分はど

れだけまだまだ成長しないといけないのかを実感することになりました。1時間ぐらい研究室で先生が時間を割いてくれたんです。そういうふうな面と向かって一緒に通じ合う心と心の対話が僕の心を動かしてくれたんだと思っています。またもやスタント先生のケアリングの餌食になってしまったというわけです。

最後に、この言葉を紹介しておきたいと思います。僕もこれから先輩になり、教師になり、もしかしたら親として教育に関わることもあるかもしれませんが、僕自身もこういうふうなことを胸に刻んで。それから、さっき半分冗談でスタント先生の写真を出したんですけど、もう半分は実は冗談じゃなくて、スタント先生は今一人で孤軍奮闘されているけれども、教え子たちがミニスタントとなって、もっともっと世界をよくして行ってほしいというような思いを持っていらっしゃる。だから僕はそうなれるように、その言葉が気に入るかどうかは別として、また、もっともっと成長してから皆さんに認めてもらえるように頑張ろうと思っています。

これまでの僕と、これからの僕を見つめ直して、それから僕を支えてくれる存在を再確認することがこのシンポジウムでできました。このすばらしい機会を与えていただいたことをこの場にいらっしゃる皆様の方にお礼を申し上げます。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

ゲスト

9

水谷 真愛 (早稲田大学国際教養学部4年)

## 「What's Your True Motivation」スタントゼミを取るようになったきっかけ： 「劣等感」を克服したい、自分を変えたい

皆さんこんにちは。私は国際教養学部4年生の水谷真愛と申します。私はスタント先生のゼミに入って約1年間、先生のもとで教育学や心理学について今学んでいます。今日は、私は先生の授業によって内発的動機付けという概念が本当に向上したので、皆さんに「内発的動機付けで人は変わる」というテーマでお話をします。

まず、私が先生の授業を取るようになったきっかけであるイギリスでの留学体験についてお話ししたいと思います。私は、大学2年生の秋にイギリスのロンドン大学ロイヤルホロウェイ校というところで10カ月間の留学をしました。私がその留学経験で一番身にしみて感じたのは、日本とイギリスにおける授業の違い、また自分自身の性格と現地の学生たちの性格の違いでした。まずイギリスの授業というのは主にディスカッションが中心で、生徒が能動的に参加をするスタイルでした。彼らは本当に、自分の頭で考えてそれを表現するということがすごく上手で、自己主張もとてもうまくできるし、将来の夢や目標、アイデンティティーをすごく強く持っているなという印象でした。

それに比べて、私が今までやってきた勉強というのは暗記が中心で、授業も大講義が多かったので、受け身的に聴いてしまっていて、自分の主張をするという訓練がまったく出来ていませんでした。そして自分の性格というのも、自己主張するのがとても苦手で、将来の夢や目標といったものがはっきりと定まっていませんでした。そして、留学先で初めて、「自分のアイデンティティーって一体何なのだろう」というような、日本で感じたことのない悩みに直面することになりました。そして、自分自身とイギリスの学生たちを比べることによって劣等感を強く感じるようになってしまいました。

そして帰国後、私は「何としてでも自分の劣等感を克服したい。没頭できる何かしてほしい」というように強く思いました。そして、自分が心の葛藤というのを経験したので、私も人の心や、モチベーションといった心理学、また、日本の教育についてすごく興味を持つようになりました。

私は以前、留学の前にスタント先生のデジタルについての授業を受けていたのですが、先生の感動教育やスタントメソッドといったとても情熱的でユニークな教授法に魅力を感じて、先生のゼミであるPositive Psychology and Educationに加入しました。そして、きょうは先生の授業で学んだことの一つの内発的動機付け、intrinsic motivationについて皆さんにご紹介したいと思います。

まず内発的動機付けというのは、外発的動機付けの反対の概念です。それは、自分が行う活動以外の外側から得られるモチベーションです。お金や昇進、他者や社会からの評価といった、そういった外側の報酬、それは日本では特に重視されがちな傾向があると思います。それとは反対に、内発的動機付けというのは、自分が行う活動そのものから得られるモチベーションです。自分が心からわくわくするような夢や好奇心、趣味など、自分の内側にある本当に純粋な欲求がモチベーションの源泉です。

私はスタント先生から自分の生きる幸せや本当のモチベーションにとって、内発的動機付けがいかに重要かということを教えていただきました。そして、特に先生の提唱されているスタントメソッドの中で、特に私が効果的だと思った点について紹介したいと思います。

まず「学生の長所、才能、潜在能力を見出して伸ばす」という点です。先生は先ほど皆さんが言われて

いた、授業の後に書かせるコメントの内容や、授業中の発言、また、プレゼンテーションの内容を先生が聞いて、「君にはこういう才能がある」といった、ポジティブな生徒の長所についてのフィードバックをいつもしてくれます。先生から客観的に褒められることによって、生徒は自分も自覚していなかった自分自身の能力について客観的に気付くことができ、それが生徒の大きな自信や達成感、モチベーションにつながっています。

また、True storyというのは、先生や生徒が自分の育った生い立ちや、自分が本当に心の中から感じていることをみんなの前で発表する機会のことです。クラスの皆の前で自分の本当に思っていることを発表する場合は、クラスの中に共感や感動、そういった情動的な交流を流します。それは学生自身が人と人との絆や思いやりを感じるきっかけとなり、自分が心の底から感じるモチベーションというのにつながっています。

また、最後に、先生は学生に大きな「挑戦」をさせます。私が今皆さんの前でこうやって話していることも大きな挑戦の一つなのですが、人前で意見を発表すること、また、メモを見ないで英語のプレゼンテーションをすることなど、そういった、時には困難を伴うような挑戦をさせるのですが、それが学生に大きな達成感、着実に自信を身に付けさせること、また、内発的なモチベーションにつながっています。

先生のスタントメソッドによって、私は自分の本当のモチベーションというのに気付くことができました。まずスタント先生のモチベーションである、「生徒の心に火をつける」、また「やる気を引き出す」、「他人の幸せや成功のために働く」ということに私も大きな影響を受け、自分のモチベーションは心理学と教育をもっと追求すること。そして、その知識を活かして、今度は自分が人の役に立ちたいという思いだということに気付きました。その自分のモチベーションを自覚することによって私には大きな変化がありました。

まず、内発的動機付けは、人との比較というものを含みません。ですから、私は人と比べることをやめ、劣等感を克服することができました。そして、内発的に動機付けられているので、すぐにそれをアクションに移すことができるようになりました。そこから大きな満足感が得られるので、高いモチベーションを常に維持できるようになりました。

最後にまとめですが、内発的動機付けというのは自分の正直な心の声に耳を傾けることであり、それは自分のユニークな個性や長所を磨いて輝かせることなのだということです。また、それは劣等感から人を解放して、常に高いモチベーションを維持できることにつながっている。そして内発的動機付けは人生における成功や幸せの鍵になるということを私がスタント先生から教わった一番の学びとして皆さんにお伝えします。以上です。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

ゲスト

10

小西 孝和 (早稲田大学国際教養学部3年)

## 伝わる者から伝える者へ

## - 20 ~ 30代への教育の必要性 -

皆さんこんにちは。長くなってお疲れの方もいらっしゃるかもしれませんが、少しお時間をください。僕は早稲田大学国際教養学部3年の小西孝和と申します。

プレゼンのタイトルとして「伝わるものから伝えるものに」ということでお伝えしたいと思うのですが、僕も他の学生と同じようにスタント先生によって変わった人間です。それだけでなく、それを踏まえてこれからどうしたいのかということをお話ししていきたいと思います。

いきなりグラフを出したんですけれども、これは僕の大学生活でのモチベーショングラフなんです。ちょうど3点あるんですけど、これが大学1年、2年、3年となっております。これを基準にしてきょうはお話をさせていただくんですけれども、これを便宜的に4つに分けて、無垢編、モチベーション暗黒編、転換共感編というふうにお話をしていきたいと思います。

では、無垢編なんですけど、僕はちょっと他の学生と違って、大学1年の時はモチベーションがある人間だったんですね。というのも、途上国開発の夢というのがありまして、それに伴って行動力、学習意欲とかなり高いものでした。実際に、2カ月間、バングラデシュのグラミン銀行というところでインターンをしてきたんです。そこで貧困の現状を目視して自分のやりたいことをやってやろうと、まあ、自分の力で世界を変えてやると、無垢な思いですね、そんな思いを抱えながら途上国の地を踏みました。

ですが、絶望します。というのは、貧困国に行って初めてわかったんですけど、貧困国の現状というのはすさまじいものでして、僕は当時のすごい貧民層と同じレベルの生活をしました。お湯もないし、電気もない、そんなところで2カ月間過ごしたんですけど、そこで己の力の限界を感じた。貧困というのはやっぱり政治、経済、環境、いろんなものが集約して誇大化しています。そこで自分ができることって皆無だったんです。もう絶望です。僕はここで夢を失うことになってしましまして、その結果、著しい学習意欲の低下、行動力の低下、何より、何をしたいかわからない。僕はここで夢を失ったんです。永年の。絶望です。先ほど絶望は大事だというお話を伺ってすごい勇気づけられたんですけど、ここで僕は本当に絶望しました。

ですが、転換期ということで、スタント先生の少人数授業を受けました。たまたまだったんですけどね。こちらで、結果を言ってしまうと、僕はモチベーションを回復したわけなんですけれども、それは3つ要因があります。一つ目はスタントメソッド、皆さん口を酸っぱくしておっしゃってるんですけど、これを一言で言うというのはすごく難しいんですね。なので、一つ例を挙げると、先ほど先輩が言ってくれたように、ここで僕がスピーチしているのもそのメソッドの一つなんです。というのも、先生は大きな舞台を与えてくださると。もしかしたら、この中でちょっと学生の人数が多過ぎだと、疲れてんだという方もいらっしゃるかもしれませんが、じゃあ、その学生にこれだけのチャンスを与えられる人が日本にどれぐらいいますかと。それは大きなスタントメソッドの一つの魅力だと考えております。

二つ目は、熱意と姿勢ということなんですが、先ほどスタント先生の実際のスピーチを聴いてくださったので、その熱意はすごいと思うんですけど、実際、授業となると週一で、あれは、もう僕一人に向くんです。その熱意が。そのすさまじさたるや、それがお伝えできないのが残念なんですけれども、そ



## 動機付け教育の重要性

皆さん、お疲れ様でございます。国際教養学部3年生、窪響と申します。私のプレゼンテーションでは、スタントメソッドを通じて自分のモチベーションがどのように変化したかということをお伝えしたいと思います。

まず初めに、自己紹介がてら変化前のモチベーション、つまりこの大学に入る前のモチベーションについてお話ししたいと思います。わかりやすい人間で、大きく分けて二つありました。勉強と趣味です。一つ目の勉強は、ただ単に本当に振り返るのも恥ずかしいのですが、いい大学に入りたいと、誰もが知っている、優秀な人が集まりそうな大学に入れば将来の心配はないという漠然とした考えを持っていました。さらにもう一つは、趣味の津軽三味線の演奏でした。高校の頃から始めて、部活にも入らず、この練習に明け暮れて、あとは都内のライブハウスや老人ホーム、地域のお祭り、あと全国大会など、さまざまな演奏活動をしてきました。ただただ知らない人から演奏を通じて褒められたいという一心で過ごしておりました。

何とか大学に入った後、当たり前ですが、壁に当たります。一番最初は英語。当時、海外に行ったことがなかった学生だった私は、入学式の英語のスピーチさえほとんどわからず、それで授業についていくための英語の勉強で本当に必死でした。その状況の中で、自分の大好きな音楽を続けていくというのは本当に無駄なことではないかと、自分のモチベーションに対して疑いが出てきました。しかし、留学前にスタント先生の中級演習の授業を履修したときに、自分のモチベーションに変化が起きました。他の先輩方のプレゼンテーションもそうですが、この授業では感動教育という名前のもとに、とにかく学生のモチベーションを促す環境だったと思います。

例えば、リアルストーリーの共有。学生の本当の自分が体験してきたことを話したり、それを聞いたりすることで、まさにこのプレゼンテーションもそうですが、その他者への感動、理解を考えるきっかけになりました。さらに授業後のコメントシートプレゼンテーション。例えば、この右下の写真は、私がスタント先生の授業で、大学の授業で初めて津軽三味線を演奏させていただいたんですけれども、こういうことを、こういう環境を提供してくれることで学生のモチベーションを表現し、確認ができるという環境でした。

さらにこのプレゼンテーションを聞いていて、本当に実感したことでもあり、また著書から、この授業から感じたことでもあるのですが、一度モチベーションを持った学生というのは他者にもそれを共有して新しいモチベーションを促しているという、いわゆるモチベーションの連鎖反応を起こしているということを知りました。その光景を目のあたりにして私はもう自分のモチベーションを表現する手段は何でもいいから、自分に誰かのためにできることはないだろうか考えるようになりました。

自分はずそれを津軽三味線という道具でやってみようと思いました。それを考え直す際に、自分を取り巻いている環境に対して感謝しなければならないことに気がきました。なぜ初めはこの学部、英語というものは日本の自分の国の学問、文化をより多くの人に伝えられる手段を学ぶことができるということ。もう一つは、この大学には津軽三味線の同好会があって、大学で練習ができ、演奏依頼があるなど、本当に恵まれた環境にいるということに気がきました。

その認識の上で新しくモチベーション、三味線のモチベーションになったのは、感謝をメールに載せて人を感動させたいと本気で思うようになりました。このような私のモチベーションの変化とともに、周りの変化も起こりました。まず一つ目は、自分の演奏活動についてです。私は昨年、アイルランドのダブリンに留学をしていました。そこで勉強する傍ら、休日には本当にいろんな場所で演奏させていただきました。例えばこの写真のアイリッシュパブだとか、ダブリン市街地のグラフトンストリートというところのステージでストリートライブ。また、それがきっかけでいろんな方からお声かけをいただいて、他大学との日本交流イベントや、フェニックスパークというヨーロッパの大きな自然公園でのジャパニーズフェスティバル、フランス、パリでのジャパニーズフェスティバルなどにも参加させていただき、あとはアイルランドのテレビにも出たりしました。あとは、在アイルランド日本大使館で演奏をさせていただいたりなど、さまざまな機会がありました。

帰国後にもう一つだけ自分の周りに変化がありました。それはもうこの津軽三味線愛好会の三つ巴というところなんですけれども、ここでの活動のことです。帰国後に、もう自分ができることは何だろうと考えましたところ、ほとんどそこにいる人たちは初心者で、入学してから津軽三味線を始めるという人たちがいて、自分はその環境がチャンスだと考えて、ここならスタントメソッドを実践してもいいんじゃないかということで、自分も小さなモチベーションの連鎖反応を試してみたいと思い、行動してみました。

曲を教える中で、自分がこの楽器に対しての思い、自分がなぜこの楽器が好きなのか、音楽が好きなのかということと、リアルストーリーの共有で、自分の演奏活動における失敗談だとか、いい思い出とかを共有することで、一緒にこの楽器を楽しもうという活動をしました。するとその結果、多くの方が練習に参加してくださいまして、先月には、三味線を始めた方も1年、2年なんですけど、2名の方が神戸の全国大会に出場し、頭書の成績を取めました。私はこの経験は自分にとって小さなモチベーションの連鎖反応を起こせたのではないかと考えています。

以上の経験で、私が考えるスタントメソッドというものは、人の心を動かしてモチベーションの確立を促すこと。さらに、その力を得た学生は他者にも共有し、新たなモチベーションを促すことができるという連鎖反応の力があるということです。私のスライドは以上ですけれども、ここまで自分のモチベーションというのは本当に言語化しにくいもので、音楽でありますので、本当にこの場を借りてですが、締めとして1分間だけ即興演奏をちょっとやらせていただきたいと思います。(拍手)

ゲスト

12

李

麗媛 (早稲田大学国際教養学部4年)

## 「先生」の意義

私は国際教養学部4年生のリリアンと申します。よろしく申し上げます。本日のプレゼンテーションのテーマは、先生の意義でございます。多分、皆さんはご存知のように、先生という言葉は多くの意味があります。例えば教育機関で学生を教える人も先生と呼ばれますが、弁護士など優れた能力と知識を持った人も先生と呼ばれます。では、ここで皆さんは、スタント先生の先生という二つの文字はどのような意味があると思いますか、ご想像をお願いいたします。

まず私は自己紹介からお話しさせていただきたいと思います。私は2009年の長春外国語学校を卒業して9月に早稲田大学の国際教養学部に入りました。ここで過ごした3年間の中で、私はいろいろな知識が豊富ですばらしい先生と出会って、先生のもとで勉強することができました。そして、勉強の他にサークルに参加してたくさんの友達を作れて、とても楽しく毎日を過ごしました。

しかし、モチベーションというのはいつも高まっているわけではありません。例えば生活上の、勉強上の困難とか挫折と出会ったときに、私は自分の夢を見つけようと思っていても、なかなかやる気を出せず、凹んでしまったこともたくさんあります。でも、3年生になったときに私は自分の周りの友達が就職活動にがんばっていて、私はそのような様子を見て、自分も頑張らないといけないというような思いが出てきました。しかし、就職活動を初めて間もなく、私はその就活の大変さと自分の学力不足を実感して、やっぱり自分はだめな人間かなと思って、就職活動を諦めました。その時の私は、ずっと学校で勉強してて、学校の単純な勉強の生活に慣れていて、やっぱり卒業したらできるだけ学校に残って学生を教える先生になることもいいのではないかと、だから先生という夢を持ち始めました。

そのような夢は私がスタント先生と出会ったきっかけです。実は私は授業を選ぶときに、スタント先生のシラバスを見たときにちょっと悩みました。スタント先生のシラバスはA4サイズ2枚ありまして、その中には授業の内容とか目的とか評価方法だけではなくて、先生はその内容、授業に対する特別のルールとか要求とか、あるいはどのような課題があるのかちゃんと書いてありますので、私はこの授業は確かにいいんだけど、でも、例えば感想シートを毎週書かなければなりませんし、あと、中間レポートの期末レポートを合計3,800字も書かなければならないし、あと、プレゼンするときにスクリプトとか持つてはいけないというようなルールもありまして、この授業に本当に耐えられないのではないかと、ちょっと悩みました。でも、私、やっぱり自分の夢を決めまして、将来は学生の前に立つためにその授業を取りました。

先生の授業を取った後、私は先生の授業を通じてたくさんの学生を成長させるというような熱意を感じました。スタント先生が他の教授と、今まで私が早稲田を出た後の教授と違うところは、スタント先生は、例えばもし大学生と会っても厳しく教育してくれるということです。例えば、私たちも大学生ですので、もう大人になってから価値観もちゃんとできたし、やるべきことと、やるべきではないことを自分で判断できます。でも、たくさんの教授が私たちのことを大人と思って、授業での居眠りとか、私語とかも見逃しています。でも、それが確かに小さなことですけれども、でも、スタント先生が嫌がられることも恐れず、例えば授業で居眠りしている人を起こしたり、遅刻した人を注意したりしています。

私がこの授業で一番感動したのは、先生がいつも自分の本音を言ってくれることです。例えば、先生が

小さい頃からいろいろな困難を、苦難の方がいいと思いますけれども、いろんな苦難を経験したことがあります。それは多分私と違う、私の一生の中で多分経験するチャンスもないと思います。そして、私たちの想像できないほど多いと思います。例えば、先生と比べたら、私がいかにいい環境で生活していて、いかにいい環境で勉強しているかということを実感しました。

そして、先生が寛容の心を教えてくれました。例えば、自分のことを優しく扱ってくれる人に対して恩返しをするのは当たり前のことだと思いますけれども、でも、自分のことを恨んでしまって、自分を虐待する人に対して恩返しするのは確かに他の人より何十倍も広い心を持っている人だと思います。そして、先生は奉仕の精神を持っています。先生が教壇に立つのは自分のためではなくて、学生のためということを教えてくれました。

以上が私の先生に対する考えでございます。最後に私の夢なんですけど、私はやっぱりスタント先生のは心に火をつける先生だと思います。だから私も先生と同じように世界の多くの学生に影響を与え、学生の心に自信と努力の火をつける先生になるために頑張っていきたいと思います。よろしく願いいたします。(拍手)

ゲスト

13

Tai Beitze (早稲田大学国際教養学部4年)

## 魔法の種

皆様こんにちは、国際教養学部3年生、ベイツと申します。きょうは魔法の種をタイトルとして、自身スタントメソッドの感動を伝えたいと思います。

まず簡単な自己紹介からいきたいと思います。こちらの画像をごらんください。天災、死亡、リストラ、家庭問題、孤独、涙。人間はなぜ生きていますか。幸せの公式は何かありますか。1年前X私はこういう戸惑いに揺れてやる気がなくなりました。そして、ことしの科目登録の時、モチベーションスタディ・インエジュケーション、MIEというモチベーションという言葉に引かれて、MIEという授業を取ることにしました。で、モチベーション教育はどうやって学問になるのか、さっぱり見当が付きませんでした。そして、MIEで人生を変えられるという話がうま過ぎると思いました。だから、最初、1回目の授業、30分になったら教室から出ていこうと思いました。しかし、何かに引かれて、ずっと教室に残りました。

スタント先生は精いっぱい、私は誰のもとも諦めないという単純なメッセージを伝えている姿を見ているうちに、誰かに似ていると気付いて、そう、私の母です。もう、うるさがられるまで世話してくれて、とてもありがたい私の母です。こうして先生のマザーパワーを知ったお蔭で、モチベーション教育の可能性を信じることにしました。

MIE授業の魅力を本当にこちらで、さすがに言い切れませんが、きょうはこの魅力から3つを挙げていきたいと思います。まず、シェアの力です。スタント先生の人生経験とスタントメソッドに感動された先輩たちの話を聞いたら、とても勇気と自信を持てるようになりました。そして、最初、クラスの前で自分のことを語ってみたら、シェアをすることがとっても勇気が必要なものとわかりました。すると、その発表の後で周りの変化に気がきました。それは優しくしてくれた人も増えましたし、そのお蔭で私も人生を楽観していると思います。

二つ目の魅力は、マルチレベルモチベーションと名づけました。スタントパワーの伝染という話です。このマルチレベルモチベーションは一人で70億人世界を変えられるというシステムだと思います。いつも教室の中にポジティブの渦巻が回っていたように、一人の学生の影響がどんどん遠くに伝わりました。そして、蘇霞さんから初めとした多くの学生のスタントパワーを複製して、無数の影響を第三者に与えられたと確信しています。

そして、この授業の中で一番インパクトを受けたのは、毎週400字の感想文という課題です。意外なことに、私はレポートがとっても苦手な学生ですが、意外なことに毎週とても楽に提出を済ませていました。それは講義から生きるヒントをいっぱいもらったお蔭で、いつもレポートを書くときに心を一休みできて、冷静に自身探究できました。それより感動しているのは、毎回スタント先生から一人一人学生たちの感想文に丁寧なフィードバックをいただいていることです。その中に、先生からの、人生を導く言葉、励ましたり、褒めたり、叱ったり、いろいろいただいて、それを見てからもっと頑張れるようになりました。

わずか4カ月のMIE授業で、私の人生でとっても貴重な勉強をさせていただきました。確かに幸せの公式は見つかりません。孤独、いろいろな心配はまだ変わっていません。でも、戸惑いこそ人生だという事実を受け入れました。私は他の学生よりも伝え方がそんなに学術っぽくないですけど、私にとっては、スタント先生はいつもすべての人は人間の潜在能力が秘められていると信じられて、まるで種を蒔かれ

て、自分の畑を作らせられているようです。この畑から収穫できた学生は、おのずと自分の技術、知識を磨いたり、鍛えたりし続けるべきだと思います。一方で、何の益も得なかった学生は、MIE授業に時間の無駄をしたと思わないことです。なぜなら、一度スタント先生と会ったら最後、魔法の種を心に埋め込まれて芽が出るのを待っています。いつか人生の行き止まりになったその時こそ、スタントメソッドが絶対頭に浮かぶはずです。それは、種、永遠の魔法だと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

ゲスト

14

津江 南 (早稲田大学国際教養学部2年)

## 人生を変える講義

皆さんはじめまして、早稲田大学国際教養学部2年の津江 南と申します。今回私がプレゼンテーションさせていただくのは、スタントメソッドによる人生を変える講義というテーマについてです。

私がスタント先生と初めて会ったのは去年の初級演習のゼミを取ったからです。この初級演習のゼミなのですが、最初生徒三人しかいなくて、しかも途中で一人抜けてしまって、私と後で話す阿部君の二人の生徒のみとなってしまいました。で、この私が取った授業では主に教育について先生に教えていただきました。その、先生は教育を文字どおり教えて育てるということですが、日本では教えるばかりを重視して育てるのを軽視しがちである。つまり人間の中身である人間力が育つ機会が少ない。つまり、知識一辺倒の人間の状態につながっていると先生は指摘しました。

で、そんな日本の一般的な授業と違って、スタント先生の授業は育てるのを重視した講義でした。例えば、リアクションペーパー(感想文)を出したり、プレゼンをメモなしでやってみたり、先生は毎回毎回生徒が育つことができる機会をちゃんと設けてくれました。そして、先生は授業の中でモチベーションという言葉を常に意識しておりました。このモチベーションを日本語に訳すとやる気ですが、これは人生において最も大切な要素の一つであり、人の行動力の原点であり、人を変えさせてくれるものであります。

モチベーションは人生をより充実させてくれるもので、このモチベーションがないとすごく人生は退屈で色のないものになってしまいます。このモチベーションがどれだけ人を変えていくのか。私はそれを実際この目で見たことがあります。モチベーションによって変わった男の子、それは一番最初のスタント先生のお話にもありましたが、阿部君という男の子の話のことです。既に知っている方もいるかもしれませんが、もう一度私の方から説明させていただきます。

阿部君は、1年の前期にほとんど授業に出ずに引きこもっていました。その引きこもっていた理由というのが、授業にまったく魅力がなくてつまらない。日本の一般的な授業のように、教授から生徒への一方通行の知識だけの授業だからといます。彼はあまり父親とか母親と連絡もとらずにずっと引きこもっていました。そして、その引きこもっていた夏休みのある時に、彼の父親が、彼に連絡がとれなくて不安に思って、彼の所に行ってみたら、彼が自宅で失神してるのを発見しました。で、この失神していた状態なのですが、実は一時は命を失うことになってしまうくらい危機的な状況でした。その彼は今ロンドン大学に留学をしております。で、このように引きこもりから阿部君が今一流大学に留学するまでになったのは、まぎれもなくスタント先生の授業のお蔭だといえます。

なぜ阿部君が変わることになったのか。それはスタント先生の授業に対する熱い姿勢。例えば、私たちのように、たとえ生徒が二人になっても落ちないモチベーションとか、自分のトゥールストーリーを包み隠さず話してくれるなど、生徒を信頼し、心を開いた態度とか、それが彼にとって衝撃で、彼はとても感動しました。そんな先生につられて、彼もだんだんと心を外に開くようになってきました。それは私の目にも見えて、彼は授業が進むにつれ、とても目が輝いていました。そして今ではロンドンにいて、さまざまなシンポジウムに出席するまでに成長しております。

私が思うに、スタント先生は人生を変え得る先生だと思います。それは何ですかというと、生徒に対して真摯に接することができる人だからです。その態度が生徒にとって、先生を信頼するのにとても大切な

ものだと私は思います。これは言葉にするのはすごく簡単なんですけど、実際行うのはとても難しいことです。ですから先生はそれを体現しているからこそ、多くの人に頼られ、影響を与える人に、時には阿部君のように人生を変える人になれるのだと私は思います。

これで私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。(拍手)

## Growth through speech

Good afternoon. First of all I would like to apologize because every one is doing their presentation in Japanese, but I would like to do mine in English. So, I will try to speak and articulate as much as I can and I hope you can bear with me.

My name is Alex and today I am here to share with you some experiences I've had through taking Professor Soetanto's class and also I would like to reach out a little bit and talk about what I am planning to do for my final thesis. First, a little bit about myself. I come from Taiwan and entered Waseda University in 2009 September. And, as I am pretty sure a lot of students were when they entered, I had very high expectations.

Imagine the following situation. You have never been to Japan before, you're finally leaving your parents, you're going to college, and you are going to live life by yourself. You're making new friends and you're going to learn new stuff. That's exciting for sure and it was for me, but then all of my high expectations were fulfilled except for the academic expectations.

I thought that I would be learning a lot more in university. Learning from really intelligible professors and communicating with them. But then, I realized that classes in the university were not much different than my high school classes, some even worse. Some professors don't even talk to you; to them you are almost non-existent. These are only certain classes, but then there is this kind of negative cycle going around. Certain students would even like to take classes based on how easy it is to attain credit in it is and such and such.

So, after two years, which of course passed in the blink of an eye, I realized that life was good and that I was happy and all. I made new friends and had a lot of fun, but then is this really what life is all about? Just going to school, getting some grades, graduate in four years and then get a job? That's when I encountered Professor Soetanto's class. The first class I took from the Professor was called Motivation and Success, it was an intermediate seminar. I was of course intrigued by the course name because the course name itself is pretty intriguing.

Motivation and success, you see these everywhere and often times they are linked with each other. When someone is considered successful, he or she often has a high motivation and this high motivation is what brought the success. The class itself was a very speech orientated class, which I actually have an inclination for. I prefer talking in class over writing papers and stuff, and I would rather give my presentation. The Professor highly encouraged that. Students were encouraged to give presentations and they were encouraged to ask each other questions after the presentations, get to know each other and a lot of other stuff.

There are quite a few things that I learned from this class. First thing, hard work is very important. The Profes-

sor always stresses this. For example, back then I was still learning Japanese, but then the Professor would give us a chapter to read from one of his books, of course in Japanese, and we were expected to give a presentation on that. It was a really hard task. But, connecting to my second point, when you take on this sort of a task you have this really strong sense of satisfaction and gratification for what you have done. I think that is a very important part of the Professors class.

Another thing he always stresses a lot is mutual help among the students. He likes it when students try to help each other and break through whatever barriers that they have to try and achieve what the professor wants them to. And of course, that happened a lot. After that, two semesters later, I had to choose an advanced seminar. I was looking through the syllabus and wondered what I should take. Then I saw the Professors course and I thought that I might as well give it a shot because, I thought that the intermediate class was kind of easy going and I also really enjoyed it. So, I decided to take the class.

After taking this class, it made me realize again how important of a role communication plays in this class. Not just communication between the students and each other, but also the communication between student and the teacher through the usage of comment sheets. Which, is this little piece of paper that we write down our thoughts and what we liked about the class after each class. Then the Professor would give us the feedback the next class or some other time. So, through these different sorts of communication between students and between teacher, he creates this certain environment in the class.

One thing that I would like to mention that I learned through my advanced seminar is digression of speech. As the name suggests, that is when you digress when you are speaking. I learned this through Misa Suzuki's, a sempai who already graduated, final thesis. I read through it and had to do a presentation on it. Basically, in the thesis she tries to prove that the professor's way of using personal talks and real talks in class is actually a really good way of encouraging growth in students. This made me realize that what the Professor is trying to do is to create a positive loop or cycle, if you would like. First you engage in a certain study or activity and put your effort in. Then you get this certain sense of satisfaction and at last you feel this gratification. You feel that you can do more and this process repeats itself, through this process we unconsciously grow.

With this in mind, I decided on what to do for my final thesis. The topic of my final thesis will be growth through speech, which is also the title of this presentation. Basically, I did a series of self reflections on what made me grow throughout all these years. I looked back on my high school years and I realized that through speaking in class and doing presentations I had a lot of fun, but in retrospect it really helped me a lot and also made me grow a lot. Coincidentally, speech is one of the most important factors in the Professors class. This made me think that there has to be a connection somewhere.

The question that I will be trying to answer in my thesis is: can personal growth be achieved through speech in a classroom environment? Here are a few details about it. When I say speech, I am mainly referring to presentations or discussions in classrooms. These can be discussions with the professor, discussions with students, presenting

in front of students and also the relationship between students. In the Professors class, he always emphasized students getting to know each other. He would make us ask questions to one another which formed this bridge, or the relationships between us. The last thing that I wanted to see was, does the Professors positive feedback loop he uses in class actually stimulate personal growth?

That is all for my presentation, thank you for listening.

## Be an Independent Thinker

Good afternoon everyone, I am Alisha and I am a fourth year student at Waseda University from Washington State. I will be sharing my testimonial on how I became an independent thinker through the Soetanto method.

So first, I will start off with before university. I was very active, did a lot of community service, I loved sports, was a cheerleader, very outgoing and I had huge dreams of moving to Tokyo and studying Japanese in depth and becoming a translator. But, it was when I entered university that I became lost and thought that maybe this was not the path for me. That is when my motivation really slumped and declined. I hit rock bottom my third year, as you can see in the chart, and I will go into detail on why that happened.

This is because I was bound by expectations and had a lot of family pressure. People telling me that it would be a waste if I didn't stay in Tokyo, and work there; a lot of pressure from the hierarchy system, learning keigo and adapting to that. Also, societal expectations. You have to know what you want to do by your second year and obtain your job by your third year. There is also a huge emphasis on age.

As a consequence, I became depressed and withdrew from society. I didn't see my friends, stopped studying, didn't care about my appearance, and I basically lived my life like a hermit for over a year. It was through attending Professor Soetanto's lectures and the many stories and messages that he conveys through his lectures, that I was able to regain my motivation.

One thing in particular that stood out to me is Professor Soetanto's testimonial, in which he began his university career at the age of twenty-six. This is totally unheard of in today's age, especially in Japan. He went on to obtain four PhDs by the age of fifty-two. That's exactly the type of role model I needed in my life at that time. He was totally unbound, didn't care about the expectations from the surrounding people or environment. He also stressed, don't take the easy typical road and don't enter the workforce without knowing your true ambitions.

For me, I never gave myself the opportunity to think about what I wanted to do and how I could contribute to society. Attending his lectures was a constant affirmation, as well as talking with my fellow students and confirming and reevaluating what I wanted to do personally that led me to set my own expectations. I was able to learn about myself and get to know myself and accept who I was.

In conclusion, I, and I am sure a lot of people in the audience and other students who have taken Professor Soetanto's lectures, can attest to the fact that we have all become independent and free thinkers. That is my testimonial, thank you very much.

ゲスト

17

入江 彩花 (早稲田大学国際教養学部3年)

## 変化していく教室

### \*スタント:

これから二人残ります。この二人がまったく私の講義をまだ取ってない、また取ってる最中です。その変化が、皆さんが大体想像。どうすれば先ほどの学生たちに育てられるか、それが非常に貴重な。それも僕が大胆さでどうなるか。ここまできたら大成功、あと二人です。一人も珍しくて、アメリカから9月に来たばかりの学生です。しかも、思い切って英語じゃなくて日本語で講演してくれた。正真正銘のアメリカ生まれの人です。最初、入江さんが発表してくれると思っています。

国際教養学部3年の入江彩花と申します。よろしくお願ひいたします。私は今までの学生の皆様とは違って、今学期になって初めてスタント先生の講義とセミナーを受けることになりました。まだ数回しか講義を受けてないのですが、確実に教室の変化というのを感じております。今日はその変化についてお話ししていきたいと思ひます。

スタント先生は、There is no dream without suffering. ということをモットーにして講義を進めております。日本語に訳しますと、苦しまずして成功はつかめないということです。初回の授業において、5分、10分遅刻したら欠席とみなす。また、400ワードのコメントペーパーを毎週提出しなければいけないなど、あとプレゼンテーションを各自前に立って、それも原稿を読まないで発表しなければいけないという、かなりチャレンジングな講義をとっているとおっしゃっていました。また、それによって、それを成し遂げたら必ずサクセスが待っているからと先生はおっしゃっていました。やはり、そのことを聞いて3分の1の学生が残念ながら減ってしまいました。ですが、残された生徒は確実に毎週成長しております。

では、どのようにして変化がもたらされているのか。スタントメソッドの中でも私が重要としている2点を挙げていきたいと思ひます。まず、モットーであるタフなことに挑戦すること、また、それから得る先生や友人の評価というものが大変大事になってきています。先ほど申したとおり、400ワードのレポートを提出しなければならないのですが、早くに提出した方にはいつもしっかりとのお返事が返ってきます。また、グループディスカッションをして、あえて話してなかった生徒を教室の前に出させて代表してグループの内容を発表してもらいます。それによって、やはり人間というもの成し遂げたことに対するレスポンスをすごく重要にしてきています。細かい点でも、褒められたり、努力が認められたりすると、本当に頑張ろうという気になります。また、努力したなりの評価、自信の源をスタント先生は常に与えてくださいます。先生、学生の信頼関係がこのようにして築かれることによってチャレンジさせる環境にだんだんだんだん学生たちは慣れてきています。

また、スタントメソッドで重要としている2点目なのですが、スタント先生ご自身の体験談を聞くことによって生徒たちも大変変化してきていると思ひます。現状に満足せず、常に自分に厳しくしていたからこそ、今の成功があると先生は常におっしゃっていました。今までのつらい体験や苦労した体験などを、先生ご自身から聞くことによって、私たちも先生のように変わるのではないかと感じるようになりました。挑戦することの大切さ、また、消極的な自分を脱することによって可能性が大きく広がるのだなというのを感じるようになりました。また、講義をやめずに残っただけでも学生たちは大きなチャ

レンジを踏んだのではないかと思います。

このような環境によって、学生たちは大変変化しております。数人しか発言していなかったクラスも3分の1の人が挙手をして積極的に意見を出し合っています。また、火曜日のお昼に提出するレポートも週末の前に提出する学生たちが半数もいるようで、本当にこれは学生たちのモチベーションの変化ではないかと私は考えています。また、今時、やはり楽単だからといって出席もしなくてもいいような授業を取ってしまう学生が多い中、スタント先生の学生たちは毎週遅刻せず、全員参加しております。

私はスタント先生の講義を受けることによって本当に人は変わるのだなということを感じるようになりました。こういう人になりたいと思ってもなかなかできないと思うことが多いものです。スタント先生の講義を聴くことによって、私もなりたいたい自分になれるのではないかと感じるようになりました。

周りの生徒が積極的に変わっていく姿を見て、私も変化していく可能性を感じるようになりました。大学1年の時でしたらこのようなシンポジウムに出ろと言われても、多分私は出席していなかったと思います。ですが、今もこのようにして皆様の前に立って話しているだけでも、私の中での大きな変化ではないのかなと感じております。以上となりますが、ご清聴ありがとうございました。(拍手)

ゲスト

17

興侶 立哉 (交換留学生)

## スタント教授の力

Hello, everybody. Last now, everybody awake? OK. half guys are sleeping. I need you wake up. Everyone awake? OK. Thank you very much for having here today. Such an honor. My name is Tatsuya Korogi. I come from United States of America, California State University of Long beach. And today, I would like to show my story to you guys.

急にすみませんが、日本語でスピーチをスタント教授からチャレンジさせられて、日本語で今日スピーチしてくださいと言われたので、母国語ではないのですが、頑張って日本語でスピーチをしてみます。これから自己紹介するのですが、自分は興侶立哉と申します。よろしくお願いします。

自分はアメリカ生まれ、アメリカ育ちの、両親が日本人でございます。大学の方は今カリフォルニア州のロングビーチ大学というところに通っております。それで、ことし9月から1年間、国際教養学部日本語を勉強するために留学して来ました。こちらのSILS学部の方のクラスのスタント教授のMotivation and Educationというクラスでスタント教授と出会うことになり、今朝ごらんになったとおり、この感動教育のスタントメソッドという、この400字の感想文を毎週書いて、スタント先生に送って、先生と学生との会話をするとということによって、今日ここに立つことができたので、皆様、なぜこんな外人がここに立っているんだと思わないでください。この経験はスタント教授から頂き、本当にありがたい、貴重な経験なので、ちょっと自分の話もしたいと思います。

この早稲田大学にあるSILSのクラスなのですが、初日からMotivation and Education、あまりスタント教授のことも知らずに、どんなふうに分の人生が変わるんだというのも全然考えてなく、本当に授業に参加して、初日、先生が入っているのを待ってたら、スタント教授が入ってくるんですよ。おお、何か存在感のオーラがすごく強くて、この先生が面白いなと本当に目が覚めてくれました。

授業を聞いて、本当に初日って大体授業のちょっとしたオリエンテーションや授業のシラバスの説明で、大体つまらないじゃないですかと大体の学生たちが思うでしょう。今までの経験だと最初の授業は今学期でこういうものであると、本当にみんながサボる方だと思うのですが、本当に自分としてはなぜか必死にスタント教授が言っていることをノートに書いているんですよ。それで、授業の説明をしているだけなのに、あいだにちょっとした人生のレッスンも入っていて、それが何を言っているのかなと、すごくスタント先生の言葉を一つも落とさないぐらいに必死とノートを書いていたんですよ。

初日から言ってくれたことは印象に残るなんですよ。それは「もし100人の前にスピーチを指名される1人に指名させられれば、たった1分間で舞台に立つことができたなら、どうやって皆に一番印象に残されるのか」と、先生はそれを熱く語ってくれたんですよ。そして自分も、ああ、それは考えたことがないと思ひ、すごく考えたんですよ。そして最後に、どうしたら観客の皆さんの心の中に焼きつけるほどの印象が残せるか、熱くまた言ってくれるんですよ。

で、自分は うわーと！すごく感動して、どうしよう、やっぱり自分の考えている気持ちとかをどうやって1分だけの間にみんなに覚えられるように伝えられるのかというのもすごく考えました。それで、1日目にすごく考えて、大変感動しています。スタント教授という、人は実に面白い、この人はすごい人だなという第一印象があり、その授業が終わった後、スタント教授はその他の授業を教えていないかなということを考えて出して、モチベーションとエジュケーションも教えているのですが、この人はSILS学部

での他の授業を教えているのではないかと自分は興味を持ち、授業が終わった後、必死でSILSのシラバスを探しまくって、ああ、カワNSTANT教授は、スタント教授はとって！あったんですよ、それが。火曜日の三時限に、ベーシックデジタルテクノロジーというクラスがあり、彼が教えるをわかり、しかし、ああテクノロジーか、技術かとても苦手だし、数学もできないし、やはりあんまり興味がないですよ。自分の勉強は社会学ならOKですが、理工学やテクノロジーの方には絶対に行かないと思うんですが、しかしスタント教授はこの二つの全く正反対の授業をどうやってバランスよく教えるのかとすごく興味深く思っていました。それで取ることに決めましたよ。

だから、今学期、9月から、知り合ってたまだ1カ月ちょっとなんですが、2つのクラスを取ることに決め、毎週2つ400ワードの感想文を書いて送っているんですが、そこからやっぱり自分の中に咲くものがある気がしていますよ。

早くも三週間目ほどのクラスで、モチベーションエジュケーションのクラスから勉強になったもう一つのことをみんなにシェアしたい点といたら、やはり最初の第一印象として、如何にして与えられた僅かな時間に人々に印象を残せるかということをお皆さんに伝えたい。あともう一つ、スタント教授から教わったことは言語や言葉ということです。先生が自分にこう言ってくれたんですよ、「言語（言葉）はただの道具だ。大したことはない！」うわー。えーっ、自分は今日本語を勉強して、特に漢字は全然読めなくて、すごく苦手です。自分がちょっと一年だけ日本に来て、日本人として日本語をしっかりと勉強したい気持ちで来ているんですが、実際に来てみたらやっぱり大変不安いっぱいになっています。先生の言葉を聴いてから、ああ、日本語って勉強すればきるかなという不安が、この一言で、「そんな難しいことではない」という自信がどこか生まれました。言語というのは単純なことじゃん、自分がきっとできるという自信が自分についたのです！それ以上に彼が言ったことでは、言語は単なる道具だと言ってくれました。その自信の基で日本語と英語だけでは足りないんだ。他の国の言葉も必要だと理解をし、自分にも、その三つ目の言語言葉を勉強できるとの勇気が沸いてきました。実際まだ勉強を始めていないのですが、でも、勇気がついてきたので、これから他の国の言葉も勉強したいと思います。それが第二点の授業の効果です。

最初が第一印象、二番目が言語はただの道具だということで、やっぱり自分も最初に言ったとおり、モチベーションエジュケーションとこのベーシックデジタルテクノロジーの、どうやって重なるのか、彼の教えている授業の裏のメッセージは何なのかという知りたい気持ちがあります。今では、6週間になってきたのですが、この間にどんなメッセージを受け取ったかということで、この2つのクラスで重なったメッセージを漢字で表わしてみたくちょっと漢字を書きました。

最初に思い浮かんだ言葉は「感動」です。「感じる力」、学生に対する「愛情」、「努力」、「勘」、あとは「人間力」です。この6つの漢字がスタント教授の授業を通して一番大事なメッセージを受け取ったときに、すごく目立つんです。この中に更なる共通する漢字が2つあるんですよ。最初は「心」なんです。2つ目が「力」です。要するに、スタント教授は彼なりの教育法、先ほど言ったとおり、教育って教えると育てるからなるのです。彼なりのその方法で学生さんたちに「心の力」を与えているのではないかと、自分はそれがスタントメソッドなんじゃないかと感じることができました。

スタント教授に、短い発表ですが、貴重なチャンスをして頂き、本当に感謝しております。これからはどうぞよろしくお願ひします。あと皆さんもお話を聞いてくれて本当にありがとうございました。（拍手）

## 〔閉会の辞〕

スノードン ポール

(前早稲田大学国際教養学部長／早稲田大学国際学術院教授)

スノードンでございます。私が出席していないのに、この高い所に立つのはよくないけれども、許してください。

私は、以前、スタント先生の上司でありました、2010年まで、学部長を務めさせていただいたので上司でした。で、あれから私たちは同僚である間は、ある意味ではずっと上司です。どうしてかということ、それは年功序列ではなく、国際教養学部の教員室での郵便箱の順番ですから、私はスノードンで、彼はスタントさんで、本当はアイウエオ順だったらスタントさんが上ですよ。でも、国際教養学部は英語順ですので、SNがSOよりも少しは前なので、永遠に私の郵便箱が彼の上に残りますので、失礼しております。

きょうは皆さん長い間、先生のとて元気なお話を聴いたと思いますけれども、私はモチベーションが足りないから出なかったということではなく、授業がありましたので、ちょっと授業に対してもモチベーションを十分持っていますし、学生たちにも休講させるとモチベーションが消えるから、申し訳ありませんけれども授業をそのまま持たせてもらいました。でも、ここではきっと実りのある話がいっぱい出たと思います。

学外の方々もこの言い方をご存知かもしれませんが、学内では何十年も前から、このような話がありますね、早稲田大学について。学生が一流、設備が二流、教員が三流という言い方をよくされてきました。まあ、学生たちは、今日先生の学生も出ていますので、それはちゃんと一流だということはよくわかりだと思います。周りの設備をご覧になると、これはあまり二流というふうに見える方がいないと思います。もう既に早稲田大学は設備にはたくさんお金を投資して、設備こそ一流にできていると私は思っています。で、教員については、私はともかく、大体四流、五流ぐらいだと思いますけれども、まあ、スタントさんのすばらしい話を聴くと、やっぱり早稲田大学には一流の教員もいるということなので、皆さんお聴きになって安心したと思います。

そういうような雑話だけですけれども、きょうは恐らく大変面白い話をお聴きになったと思いますし、スタントさんの学生さんも参加して、大変意味のあるようなシンポジウムをなさったと思いますので、長い間、ご出席していただいて感謝を申し上げます。先生にも感謝申し上げますし、ご挨拶として考えてください。どうもありがとうございました。(拍手)